
Twinkle, Tremble, Tinseltown

セールス・マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Twinkle, Tremble, Tinseltown

【ノード】

N2060Y

【作者名】

セールス・マン

【あらすじ】

アメリカのどこにある都市、ティンゼルタウン。夏は暑くて冬は寒い、そして犯罪発生率は州屈指。ここで生きるには少しの冷徹さと多くの知恵、ついでに無限の度胸が必要だ。

セックスとバイオレンスに彩られた街で繰り広げられる悪党たちの活躍を描くハードボイルド短編集。

登場人物紹介

ティンゼルタウンで蠢く人々について（掲載順、隨時追加）名前、紹介、主要人物として登場した話の順です。作者の覚書とも言います。

フェルナン

スピアーズに雇われた運転手兼使用人。

• Igor's alive

クリスタ

どんな要望にも応えるプロの娼婦。

• pimp taxi route 1
• swim near the bottom

ギャッジ

女しか乗せないタクシー運転手。

• pimp taxi シリーズ

スリム

金次第で誰とでも組む狙撃手。

• The maverick, The proud
• from dusk

リー

医療刑務所に収監された青年。

• if

ダリル

人を殺さない探偵。

• meet Groilia

ジョイス

罰当たりな尼僧。

• meet Groilia

ソロ

軽薄なイエロー・ジャーナリスト。

• Tamed Stallion

ブランチ

大人しい令嬢。

• Tamed Stallion

ラビー

熟練の裏社会の人間。

• Igor's alive
• swim near the bottom

レス

俳優を父に持つトラック運転手。

- swim near the bottom
- want wipe down under overlap

ドクター・キルケア

墮胎手術で荒稼ぎする医師。

- want wipe down under overlap
- till dawn

フロリー

被虐的趣味のあるストリッパー

- from dusk
- till dawn
- November morning

以下隨時掲載、加筆。

ミスター・スピアーズがまた新しい男めかけを連れてきたらしい。ティンゼルタウンの上流階級はあるか、通いで来ている家政婦の口から相当な下々の者まで噂が伝わるのに、一週間と掛からなかつた。

もつとも噂はあくまで噂。そもそもこの街で検事なんて職業は憎悪半分、畏怖半分の眼で見られるのは当たり前だし、彼の犯罪者に対する容赦ないお仕置きは世間に広く知れ渡つてゐる。脛に傷ある連中や資金集めパーティーの招待状を受け取れなかつた有閑マダムは、くだらない風評へ涎を垂らして飛びついたに違いない。材料は揃つていた。ミスター・スピアーズは20年ほど前に結婚した妻をたつた半年で追い出して以来独り身を貫いていたし、かといつて浮いた話は皆無。料理を作りに来るミセス・カーシュを除いて家で使うのも男ばかりで、それも入れ替わり立ち代りやってくる彼らの特徴がどれも似たり寄つたりときては。

今回運転手とプライベートな身辺警固のために雇われたフェルナンも、世間が推測する「採用条件」にぴたりと当てはまる男だつた。白人、ジョン・ウェインばりの逞しい体躯、端整な顔立ち、余計なお喋りはなし。そしてブロンドではない。脚立に跨つて二ワトコの枝に鍔を入れている姿などノーマン・ロックウェルの描く絵にでも出てきそうな風情があり、声を掛けでみたいと思う女性がいても不思議ではなかつた。実際幾人が当たり障りのない会話を交わすことには成功しているし、もうしばらくは挑戦者も後を経たないだろう。

迷惑なのは疑いを掛けられた当の本人で、と言いたいところだが、

実際のところ彼の本心はわからない。いくら下世話で勇気ある人間でも面と向かって正体を聞くことは出来ず、かといって彼の経歴を知っている者もいないので勝手な物語は妄想以上に膨らまない。街の外のガソリンスタンドで目をつけられた、いやもともと海兵隊員だった、などと勝手に話が作られても、本人はどこ吹く風。訊ねられたら答えるのだろう。しかし誰も聞き出さずにいた。

結局のところ怖がりな小市民が気にするのは彼が良い人間か悪い人間かという一択問題に尽き、その点に関して言えば、どうやら悪い人間ではなさそうだという意見が大多数を占めるのにそれほどの時間は掛からなかつた。口数こそ少ないものの、フュルナンはその態度で自らの性質をちゃんと表明することが出来たからだ。

窓ガラスを叩く指先は赤く、ガレージの外に据えつけられた照明を反射して硬質な輝きを放つていた。灰皿の中でもみ消された煙草が断末魔の紫煙を上げ、細く開いた窓の隙間から溢れ出す。それが髪に纏わりつくことなどお構い無しに、女はシャンパングラスを車内に差し入れた。彼が逆らわないことを知っていたのだろう。丸く結わえてピンを突き刺した茶色の髪の下、テグスで皺を伸ばした顔が艶やかな微笑を湛えている。

「差し入れよ」

強化ガラスが完全に降りたにも関わらず、フェルナンの表情はまだ読めないままだつた。ただ礼儀に則つて、明らかに酔つている口調の女へも律儀にどうも、と返す。渡されたペリエへ口を付けていないにも関わらず、彼の声は低く心地よくしゃがれていた。

「パーティーは？」

「退屈つたらありやしない！ もつとも今回の目的は、ルヌヴィエ・ドゥ・ラ・ソミユール伯爵夫人への謁見ですけどね。それにしたつ

て

摘まんで掲げた自らのシャルドネを「くりと飲み、綺麗に描かれた眉を吊り上げる。

「あら、これはお家の特産品じゃなくてシャブリなの」
幾台かのリムジンが押し込められた駐車場は、二人以外の人影が見えない。このご時勢に個人契約の運転手を抱える者など稀だし、その貴重な数人も下層階級用に用意された晚餐を平らげに邸宅の台所へ集つている。主人の悪口や噂話が飛び交う社交場へ新しい仲間が滅多に脚を運ばないということは、謎が謎を呼ぶ一つのきっかけになっていた。女もそれを聞きつけ、当て込んで来たに違いない。庇のおかげで薄暗い建物の中、胸元につけたダイヤと同じくらい藍色の両目が輝いている。アルコールのせいではないだろう。高い酒は酔つためにあるのではないのだ。

緋色のドレスを地面に引きずることなど全く構い無しで、女は磨き上げられた車体に寄りかかった。

「こんな良い男を車に閉じ込めとくなんて、グレッグもワルよねえ」
フェルナンは微笑んで、窮屈そうにシートへ埋めていた身を据えなおした。大きく開かれた胸の谷間を注視するわけでもなく、青灰色の瞳を失礼にならない程度の真剣さで女の口元に向いている。むしろ相手の体を遠慮会釈なくねめまわしているのは女のほうだった。お仕着せのタキシードでは隠し切れぬ二の腕の筋肉は、ジムで個人トレーナーと一緒に設計する観賞用のものではない。緩い下目使いを維持したまま、女はわざとらしい吐息を零した。

「フェルナンって、どうかしら。フランスっぽいわね。それともスペイン?」

「カナダですよ」

押し出すような口調でフェルナンは答えた。
「当たらずしも遠からずつてところ」

「ケベック?」

「Non-madame・Je suis de Vancouver
ver.」

「す「じ」い」

さやつさやつとまるで少女のような笑い声を上げ、女は手を叩いた。

「軽口も言えるのね」

でも、と少しだけ眉を顰めグラスを振つた際、僅かに残つていたシャルドネが底で跳ねる。

「奥様はやめてちょうどいい」

「では……ええ」

数秒動きを停止してから、男の丸い目が瞬く。そして言葉を飲み下した後にやつてきたのは困惑とかすかな含羞だった。先ほどから男の顔つきは少しずつ、段階的にその柔らかさを増している。固まつていた表情筋が動き始めるにつれ、その面立ちが実はお澄ましだに向いていないということが明らかになっていく。動物のように即物的な感情を表に出したとき、男は黙つている時の数倍魅力的だつた。

「何と?」

柔和といつよりは愚鈍に近い顔へ戸惑いを上乗せして、フェルナンは居心地悪そうに肩を揺らした。

「名前」

まるでその瞬間を待ち構えていたかのように、瞳の奥がきらりと光る。機械油の匂いが漂う空氣の中で豊かな髪を揺らし、女はほんの僅かに顎を持ち上げた。

「そう、名前でね。堅苦しいのはいや」

身が屈められ、年を食つてもそれなりに美しい顔が同じ高さにまで降りてきたとき、フェルナンは片眉を吊り上げた。

「じう呼んで」

女の唇が窄められたのと、男の眼が再び感情を無表情の奥に隠し

てしまったのはほぼ同時のことだった。

放射状に飛び散った脳漿と筋組織を顔といわば胸といわば浴びた時、フェルナンの頭へ咄嗟に浮かんだのは、ああまた怒られる、という慣れきった怖れだった。発射音も掠めた357マグナムに切り裂かれた空氣も確かに傍を通り抜けたのだろうがさっぱりわからぬ。ただトマトのように碎けた女の顔右半分で視界が潰れるのを引き継ぐよう、彼は目を強く閉じた。静寂に血塗れた肌の上を撫でられて、そのまま更に眉間に皺まで寄せる。このまま何も聞こえず、主人も車も自分自身も、世界に存在するありとあらゆるしがらみが全て消えてしまえばいい。心の底から思いながら、フェルナンは次に訪れる声を強張った体で待ち構えていた。

「バンクーバーだつて？」

彼が願っていたよりも早く、少し高い声が血の氣の引いた耳朶に滑り込む。手探りで目元を拭い、ついでに右頬へくつついた大きな塊を指一本で摘まむ。ねばつく瞼をこじ開ければ、手の中で歪む女の目玉と視線が絡んだ。赤い蜘蛛の巣状の膜に覆われたそれは、先ほどの恐ろしい輝きなどどこへやら。ひしゃげて透明な液体を溢れさせ、血の涙を流しているかのようだった。

のののひと顔を持ち上げたフェルナンを待ち構えていたのは、掌にある瞳よりももつとぎらつく青い目だった。既に銃は引金を引いた手とともにコートのポケットへしまい込まれている。

「俺もケベックだと思ってたよ」

引き攣るような笑顔でも、彼にとつては本心からのものなのだ。ここまで汚れてしまえばもうクリーニングも糞もない。袖口で力任せに顔を擦ると、フェルナンは運転席のドアを開けた。崩れ落ちた

女の頭に扉がぶつかり、力任せに押しやる。無論、誰からも文句が返ってくることはなかつた。

「グレッグは？」

「まだ会場に」

「顔繫ぎも大変だな」

ふんと鼻を鳴らした様子を静かに見遣り、フェルナンは脱ぎ捨てたジャケットを車の中に投げ入れた。

「お待ちになりますか」

「ああ……いや、いい。ドレスコードに引っかかる」

ジャケット代りに羽織つた薄手のスプリングコートをひらめかせ、男は車の後部に回つた。

「それにフランス料理は堅苦しくて性に合わない」

開いたトランクに骸を放り込むのはフェルナンの仕事だつた。魂を失い肉体が重さを増しても苦にせず軽々と抱え上げ、引きずるドレスに躡くこともない。まるで荷物でも運んでいるかのように感情の籠らない動きを嘆くよう、垂れた女の首が左右に振れる。

「先週はどうだつた」

乱雑に作つたスペースへ瘦せた体は収まるものの、長い裾ははみ出したままだつた。丁寧に巻き取り屍の膝に挟み込んでから、男はフェルナンに向き直つた。

「あいつ、喜んでたか

「多分、恐らくは」

台本でも読んでいるような口調でフェルナンは言った。

「はつきりとは分かりませんが」

「冷たい奴だな」

ちよつぴり肩を竦めるのはやはりポーズだけで、その田元は穏やかに笑い皺を刻んでいた。

「社交だなんだつて言つて、本当にちゃんと出来るのかね。生きた女一人相手に出来ないくせして」

人の頭を瞬きもせず撃ち抜く癖に、その口ぶりはあくまでも慈愛

に満ち満ちているのだ。これは恐らく、フェルナンの知らない遙か昔から何一つ変わりはしないだろうし、これから先変わることもないのだろう。滔々と紡がれる悪行の羅列が耳の奥に溜まり、顔に張り付いた血肉が乾いて固まり始める。ぼうっとした意識の中、目だけで捉えていると、男の口から飛び出すものが世にも恐ろしき罪の詳細ではなく、何かもっと人の心を暖める、優しくて美しい言葉であるような気がしてならなくなってくる。

「そういえばミスター・スピアーズが」

自発的にか外的要因からか、鈍った脳から声が滴り落ちる。

「部屋に閉じこもられた後、しばらくして中から啜り泣きが」

「気にするな、毎度のことだ」

搔き消すように手を振り、男は苦笑した。

「結局のところ、意氣地なしなのさ」

乱暴に閉じられたトランクの音で一瞬搔き消されたものの、ざわめきは確実にこちらへと近付いてくる。首を伸ばし、男は柔らかく目を細めた。

「もうお開きか」

これも買い戻されたロレックスは薄暗さのせいで見えないが、恐らくもつすぐにでも日付が変わる。幸い車を回す使用人たちがまだ台所で燻っているらしい。指にくつついた肉片を剥がしているフェルナンに、男は自らの着ていたコートを押し付けた。

「顔だけは何とかしどけ。後は暗いから分かりやしないさ」

シャツだけだと思っていたのは勘違いで、男はコートの下にアルマーニのジャケットをちゃんと着込んでいた。ポケットには引き抜かれたネクタイまで突っ込んである。もしかしたら軽蔑は口先だけで、彼も会場に紛れて無銭飲食を楽しんでいたのかもしれない。短い付き合いだが、男のそうした俗物的などころをフェルナンはしつかりと見抜いていた。

「そうだ、グレッグに」

身を翻す前に、引金を引いた指がフェルナンの胸をさし示す

「お袋の病院を移すことは反対だつて言つといってくれ。あれ以上高いところに入れても、寝たきり老人には勿体無いってな」

頷いたのを確認することなく、男はのんびりとゲートに向かつて歩き出した。血は争えない。短い芝生の上でぽかりと浮かんだ男の後姿は、確かにミスター・スピアーズのものとそつくりだつた。今更ながら、今日の月が満月に近い巨大な白さを保つて空に浮かんでいたのだと知る。走つた寒氣に、フェルナンは丈の短いコートを強く握り締めた。

顔を洗つたり車のボディから血飛沫を拭き取つたりといった作業を終えたフェルナンが運転席へ戻つたのは、そろそろと雇い主を迎えて行く運転手たちがガレージに戻つてくる直前だつた。暗がりの中を浮かれ歩く陽気な姿から見るに、もしかしたら一杯くらい引っ掛けてきたのかもしれない。声を掛けられたときは答えるものの、それ以外はいつも通り。シャツに飛んだ血を隠すようハンドルに覆いかぶさつて、しんねりむつりと口を噤んでいた。

ミスター・スピアーズを拾つて帰宅したら、まずはトランクの中のものを主寝室に運び込む。車を掃除し、恐らくどこかにめり込んでいるはずの銃弾をほじくり出さねばならない。七時きっかりに起き出すミスター・スピアーズがシャワーを浴びるために部屋を出た頃を見計らい、血まみれになつたシーツで取り残された客を包んで庭の納屋に。置いてあるドラム缶の中身を庭のポインセチアに撒き、今度はシーツと服を引き剥がした客を中心に押し込んで石灰をかける。鍵を閉めたら残りのものをごみ袋に詰めて二つ向こうの通りにある集積所へ捨てていく。それから後はもう、いつもどおり。セイヨウ

カリンの剪定をして、余計な噂を聞き流す。

それだけのことができる知能に見合ひ給料が、毎月雇用主からフェルナンに手渡されていた。

続々と灯り出したヘッドライトに、黒いハンドルを固く握り締めた指の関節が白く浮かび上がる。いつだつたか、この手を女に褒められた事があつたのをフェルナンは思い出した。指が長くて大きくて、体の割にはとても纖細な造りなのだという。そのときは少し納得したもの、今視線を落とせば太った五匹の蚕が無様に革へ巻き付いているだけにしか見えない。

指に限らず、日々体が昔の人間的な それは優しく、鋼のよくな頑強さを持ち合わせていた ものから、もつと違つぶよぶよとした何かに変形していく事実に、フェルナンは慄いた。

それでもこの体を蛆から守るために、出来ることをやうねばならない。今できることは何かと探る。

ミスター・スピアーズを無事に家まで連れ帰ることだと生存本能が選択し、フェルナンはイグニッシュョンを回してのっぺりとした無表情に顔を戻した。

車内に充満した情事の匂いに、クリスタは露骨なほど眉を顰めてみせた。もつともその広い眉間には、運転手の迂闊さへ侮蔑を感じるほどの高尚さは込められていない。彼女はいつでも本能に促されて言葉を放ち、衝動に突き動かされるまま行動する。今もたんぱく質と分泌液の匂いを素直に不快と認識し、代りに吐き出すバーラの紫煙を覆い被せることで気分をこまかすつもりなのだろう。ものの見事に失敗し、唇が左に歪む。

「なんてスベタ！」

「あんたに言われちや世話ないね」

組み替えられた膝頭をバックミラー越しに見つめ、ギャッジはふっと息を吐き出した。直情過ぎる性格に眼を瞑れば、出るところは出て締まるべきところはきつちり締まっているクリスタの肉体は素晴らしい。強いてあげるなら膝の骨が大きいのは減点対象。すらりと伸びた脚が、あつかましい出っ張りのおかげで若干厳つく見える。多少がに股気味なものもあり、ハイスクール時代チアリー・ティングをしていたという事実が丸分かりになってしまつ。そのことも含め、娼婦にすら一定の知能を求める最近の風潮は、彼女の威勢のよさをどちらかと言えばアブノーマルな位置づけに迫りやつていた。

「レイチェル？ リサ？ や、彼女はこんなハイスクールのガキンチヨみみたいなパフューム付けないよね。この匂い……」

通つた鼻筋を軽く持ち上げ、ヘルズエンジュルスから追い剥ぎしたようなレザージャケットの肩を抱く。

「カボティース！」

「キャリーのだよ。文句言つならそつちに廻して」

女とまぐわい続けている最中も噛んでいたガムは、とつゝの昔にブルーベリーの味を失っている。鋭い水音は自らの頬の裏側に菓子がくつ付いたせいか、それとも後部座席のクリスタが鳴らした舌打

ちか。古びたイエロー・キャブのエンジンは余りにも大雑把で、ささやかな音は飲み込みまとめて攪拌してしまう。

「ガキ同士で、お似合いか」

どうせなら下らない咳きも消してくれればいいのに。自分がどのような態度を取つても彼女が子ども扱いすると分かつてはいるので、ギヤッジは黙つてハンドルを切つた。車は既に大通りを外れ、くねくねと路地に沿つて従順に進んでいる。眠ることないネオンや街灯もここまでには届かず、住人が勝手に区切つたコンパネの塀がヘッドライトの単色を乱反射させるばかりだった。

そもそも本来、彼女とて人の生活にとやかく言えるような立場はない。今夜呼び出された場所はアッパー・タウンにあるホテル・クレメンタイン。そこそこに良い客だつたのだろう。チョコレート・クッキーと同じ色をした髪を搔きあげるクリスタは、垂れ気味の眸を満足げに細めていた。

「お腹すかない？」

「今何時だと思つてんのよ。太るじゃない」

「だつて俺、夕食はいつも6時だから」

「あんた晩飯の時間なんて知つたこつちやないわ」

まずいBBQソースの掛かつたスペアリブは、四分の一皿と少しが経過した今、とつぐに血となり肉となつていて。不思議なことに、ハイスクールでフットボールを追いかけていた十年前に比べ彼の胃袋はその燃費を一層悪くしていた。いつもなら今頃は、ダンキンドーナツを買いにスミソニアン通りへと車を回している時間帯だ。贋膚はゴマのついたもの。時折ホット・チョコレートを飲んでいる巡回中の太つた警察官に挨拶する。

クリスタがその手の人種を毛嫌いしていることは知つているので、ダイナーのスペシャル・クラブ・サンドあたりで我慢してもいいかと思案していた時のことだった。後部座席から柔らかく尾を引く溜息が

流れてきたのは。

「やっぱりお腹空いたんだろ？」

「空いてないってば、馬鹿」

返事が幾分鼻声混じりだつたことに驚いて振り返る。助手席側のドアに身を押し付けるようにしたクリスタは顔を横にねじ曲げ、人っこ一人いない歩道に視線を投げ掛けている。トルコ石のような瞳はいつもの硬さをなくし、テールランプの光で幾重にも滲んでいた。

「クリスタ？」

「今日の客はとつても優しかった」

細く開いた窓のおかげでようやく人の体臭が薄まる。籠もつていた煙草の灰が寒空に引きずりだされていく様子を傍観しながら、クリスタは訥々と言葉を続けていった。

「別に縛られてもファイストでも平気。仕事だし、相手があたしで欲情してるつて分かつたら気分いいしね。でもあんなに優しいのは困る」

「優しくて困るつてなんだい」

本格的に彼女の自宅行き最短経路を迂回しながら、ギャッジは訊ねた。

「あなたの胸見てたたないなんて、病気持ちじゃないの」

「ちゃんと勃ててたわよ。でもただ突っ込むだけじゃなかつた。髪を撫でられてほつぺたにキスされて。甘い言葉も掛けてくれたし」

語られる手順は、恐らく本当の夫婦ですらハネムーンの1年後にはすっ飛ばしてしまうようなしつこいもの。少なくともギャッジの母は子供たちが物心ついて以来、夫とそのような真似をしてかしていないはずだつた。類似品を求めるならば、それは恋人たちの睦み合い。笑つてもいいのならいつそ笑つてしまいたい。よりによつてその客は、ティンゼルタウン屈指のあばずれと貴い真摯さや愛情を共有しようとしたのだ。

だかその男以上におかしいのは、喋りながらも落ち着きなく煙草を吹かし、時折噛んでつぐむことでめいにippaiの怖れを表現するクリスタの唇だった。彼女はいつでも好奇心旺盛だし、どんなに過激なプレイでも果敢に挑んで愉しむ淫猥さを備えていた。特に相手から受け取れる金や奉仕は出来る限り貰つておこうと考えるかもしれないなど、いつそ感歎すべき領域に達している。

そんな彼女が、全ての動作に「丁寧な」という形容詞がつきそうな愛撫で怯えているのだ。尋常な事態ではない。もつともこの女に尋常さを求めるほうが間違つていいのかもしれないが。

「本当に優しかった？」

眼を凝らしていたら、頭上に数年前潰れたレストランの看板が見えてくるはずだ。分かりにくい通りの出口を正面で探しつつ、ギャッジは仄暗い背後に向かつて疑問を投げかけた。

「変なこと、されてない？ 自分が気付いてないだけで、実はどんなもの変態を」

「されてない！」

飛び上がるほどの大声でクリスタは叩き付けた。

「されてないんだってば。もう、なんで分かんないかな」「ごめんよ」

謝罪は心からのものだった。子供だと言われても仕方がない。学校を出てタクシーに乗り始めてから何年か。もともと言葉に注意を払わない性格も災いし、ドライバーの必修科目「気の利いた会話」の単位を取るのはまだまだ先になりそうだった。未履修なら沈黙を貫くのが一番無難だが、元来静かさを好まない性格、勝手に唇から言葉があふれ出す。

「あんただつてそれくらいの分別はあるものね」

「奥さんが子宮を取っちゃったんだって」

最初からまともに言葉を交わす気など持たず、クリスタはまだ窓

の外を見遣っていた。ひたすら壊れた壁が続く代わり映えのない景色に何を見出したのだろうか。厳しい光を放つまなこは、青や黒、緑や白とそれらを混ぜ合わせた色を複雑な配分で沈ませている。

「不動産の仲介をやってるらしいけど。子供たちも独立してただでも一人つきりなのに、奥さんは晩御飯が終わると自分の寝室に引きこもっちゃうから、彼はいつでも一人ぼっち。淋しいのねって、あたし言ったの。でも彼は違うって」

肺の奥から溢れる煙は湿った赤い唇を通過したとき、過剰な分泌を続ける唾液にタールを絡め取られたらしい。いつもよりも甘い香りが鼻先を撲つた。

「同情なんていらない、ただ自分は愛したいんだって。君みたいな良い子に優しくして、親切に扱いたいんだって」

口の中だけでなく目元にまで潤みを帯びさせ、クリスタは煙草を噛み締めた。

「あたしも応えたいって思つたし、彼のセックスは悪いもんじゃなかつた。なのにあたし、イケなかつたんだ。彼の顔を見よつと頑張つたのに、ベッドの中にいる間、ずっと、ずっと」「

ここまで言わせて、ギャッジはようやく彼女が胸に浮かべる対象を自らも具現化することが出来た。

「ああ、レスのこと？」

じつとじつと胸の奥で焦げていた同情が急速に浮き上がり、喉元で味気ない口調へと姿を変える。

「あなたの職業、承知で付き合ってるんだろう？」「

「そうだけど」

何を今更、とはさすがに言わなかつた。だがいつまで経つても歯切れの悪い口ぶりは、吹き込む風に巻かれて一層縮こまる。

「それでもやっぱり、心の中では同じこと考えてるのかなあって。あたしが仕事へ出るたびに」

「そんな性格じゃないと思つけど」

「捨てられちやつたらどうしよう

「大丈夫だよ」

間髪入れずギャッジは返した。見ているのに見ていない。女とはそんなもの。だから自分の子供が優れているといつまでも思い続けるし、地図も読めない。

「同情するつて言つけど、そんな気なんか」

今だつて、本当に視線が窓の外を捉えているかすら怪しいものだつた。軽侮を向けられようが見知らぬ場所に運ばれようが、自らの憂いに浸りきつているクリスタは氣にも掛けない。

「ただ、飲み込みたくなる。好きだなんて言われると。そうしないといくないんだつて義務感みたいなのが」

「女ドン・ファンつてわけか」

厚かましいナルシシズムとネオンの碎け散ったプラスチック看板、前と後ろから迫りくる煩雜は何の栄養価値も含んでいない。楚々と佇んでいる標識を目にして思い出したのは、この先で一週間後まで続く夜間工事、そして性欲。自分自身に呆れたら、もう最後まで話を聞く気にはなれなかつた。車を路肩に停め、ギャッジは振り返りざまシート越しに身を乗り出した。

「あのね」

「なに」

窓の外に煙草を投げ捨てたクリスタは、慄然とした面持ちで唇を尖らせた。

「説教なんて始めたら許さないから」

「説教つていうか僕の経験だけど」

「経験が聞いて呆れるわ」

「そりや僕は娼婦じやないもの」

そんな柄でもないくせに、ギャッジは汚い言葉を吐くとき、濃い眉を微かに下げる。

「僕が言いたいのは、あんたが好きだ何だつて大安売りし過ぎつてこと」

クリスタは黙つて口角を下げる、話の続きを促した。

「身体売つてるのが嫌なんじゃなくて、いかにかく氣をやるから腹を立てるんだ。もしレスが怒るとしたらさ」

「女はプッシーの付いた肉じゃない」

嘆きは半分近くが自嘲で出来ていた。

「温かくて柔らかい場所が欲しいだけなら、ブティングに穴でもあけて突っ込んでろつて話」

「だからつて」

シートと悲哀に身を委ね、ギャッジは皿らのジーンズへ手を伸ばした。

「愛情を切り売りしないほうがいいよ」

男にはそんな器用な真似などできやしない。心など。誰か一人の女か、それとも永遠に自分だけのもの。やつてくるかどうかも分からぬ機会をじつと待ち続けるなんて、シンテレラも裸足で逃げ出す夢想癖。

妥協したくないとギャッジは思つていた。例えどれほどからかわれようとも。生まれてこの方、襲い来る困難に怖気づかされたことなど数えるほどしかないと彼は胸を張つて言つことが出来た、去年辺りまでは。

自信のあつた勇気がそれでも足りないと氣付いたのは、一人ぼっちでハンドルを握つてる自分の姿を客観的に認識してしまつたある夜のことだった。幽体脱離のように自らを見下ろした途端、存在する知らなかつた未来が大挙して押し寄せてくる。今までのような怒涛の勢いだけだと、積み重ねた妥協の果てにあるものを受け入れるには不十分すぎるのだ。勝手に流れる時間が、いつの日か強さを上乗せしてくれる時が来るのだろうか。それとも本当に。

もつとも身体の方は機会を待つほど悠長ではない。ちうちうとチ

ヤツクの開く音を聞かされても、クリスタは恐怖や嫌悪を覚えなかつた。ボクサー・パンツを押し上げる立派なものを覗き込み、少年のような口笛を吹く。

「メーター、戻してくれんの？」

「うん」

動きは素早かつた。瞬く間にドアを開いて飛び出した身体は、もう一度瞼が上下する前に助手席へと滑り込んでいる。上半身を運転手の膝元に投げ出すことも一切躊躇はない。

「男乗せてもこんなこと？」

まず灰色の下着越しに一度舌を押し付けてから、クリスタは訊ねた。秀でた額に掛かった前髪を搔き上げてやり、ギャツジは首を振つた。

「女しか乗せないんだ」

本音が建前が自分でも分かっていないことを口にするのはさすがに大人気ない。だが結局彼は、形のいい後頭部を撫でながら、現れた耳たぶへ優しく囁いた。慈悲が滴り落ちそうな聲音と裏腹に、髪を滑る手のひらはまだ汗の一つも滲んでいなかつた。

「今夜最後の仕事が好きでもない男となら、あんたも少しは寝覚めがいいんじゃないかと思つて」

大きく開いた唇を一旦半開きにまで戻し、クリスタは振つてきた言葉をじっくり噛み締めた。普段は度を超して表現する媚態も、今はお世辞程すら見せる気がないらしい。

「でもあたし」

全く心の籠もつていらない口ぶりでクリスタは言った。

「あなたのことが嫌いじゃないのよ」

白々しい笑みに、ギャツジは無言で唇をねじ曲げた。

女が口を塞ぐ。生暖かい吐息が亀頭全体を包んだかと思えば、次

の瞬間には幾分ひからびた口腔内に飲み込まれていた。後はもう、興を削ぐ猛然とした鼻息が車内に蔓延するだけだった。せめて聴覚だけでも自ら管理するため、今まで存在を忘れていたガムを右の奥歯に連れ戻す。顎の動きと共に湧き出る唾液が零れない何度も喉仏を上下させ、ギャッジは股間で蠢く頭を敢然と見下ろした。

「終わつたら何か食べに行こうよ。フライドチキン位なら奢るし」なかなか芯を通さないティックから口を離し、女は真上の笑顔をじろりと睨みつけた。

「これだからガキは嫌なのよ」

スリムは我侭な男だ。

本人もそれは自覚していたが、これまでの人生で矯めようと思つたことはないし、周りの誰一人として彼を正しい方向へ導くことはできなかつた。理由は単純なようで高度。彼は自分の思うとおりに生きるためにはどうすればいいか知つていたし、実現のための手際よい方法を心得ていたのである。

例えば6年前まで同居していた彼の母親は、毎朝5になると決まって布巾を抱えキツチンを右往左往していた。眼を覚ましたとき暖かい朝食がテーブルに並んでいないと、息子は数々の罵詈雑言を投げつけ、ひどいときには新聞や灰皿が飛んでくるような事態にまで発展する。物が壊れる音に聞き耳を立て、老女の眼下に浮いた隈を盗み見るにつれ、狭苦しい集合住宅に肩を寄せ合つて低所得者たちは一人前に噂を流すようになった。

だがいくら陰口を叩かれ100年に一度の親不孝者の名を冠されても、スリムは一向に頓着しない。彼は12年という歳月を海兵隊員として立派に國へ尽くしたし、毎月欠かすことなく母の年金に高额な生活費を上乗せしてやつている。そもそも不規則な仕事柄、照り付ける陽を朝日と呼べる時間に彼が起き出していくことなど月に数回あればよいほうだつた。幼い頃ブラシやハイヒールの踵で散々折檻されたことを考えたら、この程度の横暴など駄々とも言えない。サンディエゴの訓練所に飼われた鬼軍曹は、^{Sampson Fi}彼に常なる忠誠の綴りと開き直り、そしてゲームの規則を教えた。時には過程そのものが意味を持つこともある。例えそれが結果を不本意なものに変えようとも。

結果だけを考えれば、スリムは自分で食卓を整えることに一切不満を抱いていなかつたし、母が腎臓癌で冷たい土の中に埋められた後は何事もなかつたかのようにキッチンへ立つてゐる。特にフレンチトーストの焼き具合など、そこらのダイナーのコック顔負けの腕前を有しているほどである。

母の食費が浮いて多少の余裕ができた生活費に慢心することなく、彼はまわつてくる仕事を勤勉にこなし続けた。イスラム系テロリストが放つた迫撃砲で小腸の一部を吹き飛ばされたにも関わらず、支給される年金は雀の涙ほど。事あるごとに吐き出される怒りは最初こそ在郷軍人を代表し、社会保障の不備を訴えているだけだつた。だが時間を経るにつれ彼の気炎が隊の根幹を成す忠誠心にまで及ぶようになると、途端観客は興味を抱き始める。スリムが見る見るうちに酒瓶を開け憎しみの籠つた声をあげるたび、カウンターに並んで耳を傾ける行きずりの客たちは、その不遜さに驚き半分恐怖半分で震え上がるのだ。

対して酒場の常連客は、彼が口先だけの男ではないことを嫌と言つほど知つていた。喚き散らしているのならまだ序の口、機嫌が良いとすら言える。本当の恐ろしさはアルコールを燃料にした燃え盛る炎ではない。酔つていないときこそ、スリムの狂氣は真価を發揮した。タパスを隣のテーブルに投げつけたり、新顔をビリヤード台に追いやつて力モつているうちが花だ。行き過ぎた悪ふざけや突然の癪癩に巻き込まれぬよう気をつけておけば、スリムは酒の相手として愛すべき存在とすら言えた。

もつとも口では散々痛罵するくせ、彼とて海兵隊の亡靈から完全に逃げ切つたわけではない。未だ横流しのM14 DMRに固執しているところがその最たるもので、手に馴染んでいるという言い訳の

元、神経質なメンテナンスを施されたライフルは未だ彼の生活に重要な役割を果たし続いている。伊達に選抜射手を務めていたわけではない。うらぶれた雑居ビルの一室へ忍び込み、剥がれかけたリノリウムに片膝をついた姿は「ソルジャー・オブ・フォーチューン」にスナップが掲載されてもおかしくないほど堂に入っている。実際、その肉体はカメラに切り取られたかのように動かなかつた。写真でないと分かるのは細く開いた窓から入るそよ風が伸び氣味のジャー・ヘッドを揺らすからで、それとて襟足の辺りはぴくりともしない。かれこれ1時間近く、スリムは耐え難いほどの柔らかさを持つ温もりに顔を晒し続けていた。普段の触れなば切れんといった狂猛は新緑色の瞳から削ぎ落とされ、ひたむきに照準器の向こうを見つめている。

高曇りの空は晴天の予兆だった。明日になればでこぼこした屋根が連なる裏町にも、気持ちよく太陽の光が降り注ぐだろう。洗濯物は数日分溜まつていたし、脱ぎ捨てられたパー・カーも30半ばの男が一ヶ月着続けたに相応しい匂いを纏っている。すぐ傍で揉み潰してばかりのラツキーストライクが垂れ流す紫煙も吸い込んだことだろう。いつそ帰り際にこちらのごみ箱へ突っ込んでやりたかつたが、冷え込みが厳しくなるのはこれからだ。夏は蒸して冬は凍えるティンゼルタウンの生活へ慣れれば、アメリカのどこへ行つても快適に過ごせる。数多くの転属を繰り返すうち、スリムはその事実を自らの肌で実感していた。

玉虫色の空気が顔を包むに任せ、銃を構える時間は神秘的だった。スリム自身は神を感じているわけではないし、悪魔に促されてアベックを狙い撃ちにしたサムの息子の如く自らを美化もしない。ただ、眼球から右手の人差し指に直通神経が通う瞬間の連續体は、彼の頭をヒマラヤ山脈の空気の如く清涼化させた。軍務としてなら国に対

する義務を考えるための時間であり、冷えたビールばかり夢想する果てのない待機。それがポジションを砂漠から市街地に変えた途端、単調な生活を仕切りなおすための貴重なひとときに変身する。中東にいたときは思いもしなかつた事態に自嘲でも漏らすしかない。適度に集中力を駆り立てた後に飲むものは何でも喉ごしがよく、飯も心なしか美味しい。女に対してもより一層熱くなれる。体内で起こる変化が一体どういったものかは皆目検討がつかないものの、趣味と実益がぴったり重なり合っていると考えれば問題は無い。はつきりといって、スリムは今の仕事を気に入っていた。平和なはずの国内に戻つても、結局命を量りに乗せ続けていくといつ事実を笑い飛ばせるほどには。

仇名とは裏腹に太く、鋼のような腕が持ち上がる。人差し指と中指だけを抜いた黒い皮手袋が皮膚に同化し、待ちきれない爪が引金の固い金属を搔いた。所々粉になつた石畳を、斑模様の日差しが一層混沌としたものに変える。少しだけ変化に富んだ俯瞰図には生き物の気配など見当たらぬ。存在していることは間違ひなかつた。時おり風向きの気まぐれで、ヒップポップまがいの曲が下からのぼつてくる。道を挟むようにして繰り返される同じ形をした窓のうち、一体どちらから聞こえてくるのやら。銃声も同じように劣化したコンクリートの手で反響させられ、空へと駆け上がるだろう。屋上を闊歩する鳩も驚いて青空へ逃げ出すに違ひない。

彼が自らの手で驚かせいじめる予定だつた鳥たちは、思つた以上に神経過敏だつた。狙撃銃を構えなおし、曲線を描いた銃床を肩に付ける。表面だけ熱を持つた頬に木の銃身が優しい冷たさをもたらす。

視界に滑り込んできたのは黒く塗りなおしたらしいアストロで、照準器越しにも十字架のエンブレムがきらりと光る。改造され喧しくなった排気音と閉め切つた窓ガス越しにも聞こえるミート・ロードのがなり声に、空氣すら縮こまつて固まつた気がした。スリムは一度顔を銃から離すと、消しゴムくらいの大きさになつたバンを肉眼で確認した。影と同化している後部に対し、陽光の中に突き出した運転席は丸見えだつた。助手席にも一人、恐らく後部座席にもお目当てだけでなく、搭乗限度ぎりぎりの人数が押し込められているのだろう。写真で見たわざとらしい余裕ぶつた態度と裏腹に肝は小さいと見た。車のエンジンを切ることはおろか、ショードを入れた窓すら中々開ける気配はない。

停止してから数分がたち、ようやくスライドドアが開いた。まず姿を現したのは部下の男、黒人。反対側のドアからも一人。右手に握り締められているのはデザートトイーグルらしかつた。映画の影響で持ち歩く奴がやたらと増えたが、ハリウッドスターと同じ撃ち方をしたらあつという間に肩が外れて真後ろに吹っ飛んでいくことをその殆どが知らない。アフガニスタンで指導した警察学校の生徒ですら最初は片手撃ちで決めようとしたくらいで、今更ながらスリムはメディアの弊害をしみじみ実感せざるを得なかつた。

腹を揺すりながら歩くブルドッグと同じ動きで、その男がステップから足を下ろす。取引相手はまだ来ていない。最初から来ない。スリムに金を渡した時点で、正々堂々物事を成す気など更々ないのだ。後は流れ弾や警察の余計な詮索に巻き込まれないよう、じつと部屋の中で息を潜めるだけ。もともと節穴の眼を持つ警察官はともかく、7.62×51mm弾は人間の頭蓋骨を造作もなく貫通する。ここから先はスリムの独断場。一つ、二つ、と心中で数え、車を

背に立つ男の丸刈り頭に意識を集中する。息巻くエンジンに身を委ね、得意の歌でも口ずさんでいるのだろうか。声までは聞こえなかつた。本物のブラックであることは間違いないのだが、肉体が発する音の消えた状態で口を蠹かすのは白黒映画の中に取り残されたミントレスショーフ役者のように紛い物臭い。

事実は違えど本質はあながち間違つてもいなかつてもいなかつれない。レンズで無理やり近づけているものの、実際の二人の距離はひどく遠い。目測では500メートル。同じ地平線上にいれば、すれ違うという言葉すら使えなかつた。

何が違うか、正しいか。知つてゐるのは自らのことだけ。スリムは物事を貫く力を有してゐる。必要なことは、それだけだ。数が5まで達しても、男は動き出さなかつた。

人差し指に力を込める。

人体に感じられる距離など銃弾は軽々と飛び越し、スコープの中の世界を粉碎された頭蓋骨と血肉に染め上げる。車の窓は防弾仕様だという情報を耳に挟んでいたが、頭を貫通した銃弾は見事にサイドウインドウに白い蜘蛛の巣状のヒビを入れた、のだろう。後は恐らくシートにでも食い込んだらしい。何にせよ追いかけるようにして飛び散った肉片が全てを覆い隠してしまつた。

取り巻きたちが顔を上げるのは頭領の左後頭部が弾けたせいではなく、発信源の分からぬ銃声への驚愕によるものだつた。スリムが照準を定めて、男の手に握られたデザートイーグルの銃口はうろつうと標的を探しあぐねてゐる。努力は実らず、イーグルマンは真横に吹き飛んでビルの壁に叩きつけられた。助手席から飛び出そうとしたもう一人は勘がいいのか、ウージーらしきものを片手にこちらを見ようとする。眼が合う前に鼻の辺りは開いた花弁の如く血で染まり、瞳が意識を放棄した白色に変わつた。握り締められた銃

は明後日の方を向き、短い連射音が狭い路地の上下左右を跳ね回る。

最後の締めはリーダーの死体を後部座席に押し込もうとする男だ。痩せこけた体は力の抜けた巨体の肩口までを収納するだけで、もう精一杯。だが肥満した屍は見事な盾になり、急所を隠してしまう。車はもうすぐ発車するだろう。開いたことで余計かまびすしさを増したミート・ローフの声が消えた銃声を被さり、リミットを刻む。

必要なのは貫く力。動きではない、息の根を止めてしまうこと。

肩口に掛かる強烈な反動はいつそ快感だった。胸から、尻から、赤い霧が次々と舞い上がる。痙攣する肉の動きはまだ生きていると見まがうほどで、覚せい剤を打ち過ぎた末の偽オルガスムスに良く似ていた。ぐにやりと垂れた腕を掴んでいた手が離れ、こちらに向かつて合図しているかの如く大きく振れる。

4発撃つたところで、最後まで忠実だった男は最低限の動作を以つてその場に崩れ落ちた。

もしかしたら運転席まで被弾しているかといつ樂觀は、亡骸を投げ出したまま発進したバンによつて覆された。最初から期待していなかつたので、照準器ごと視線を動かして見送る。遠ざかっていく音。付け足された四つの肉体を除き、路地は車がやつて来る前と何一つ変わらない状態に戻つた。

しばらくそのままの姿勢で状況を確認してから、スリムは銃を体から離した。ブートキャンプでの訓練どおり手早く分解してナップサックへしまい、パーカーに袖を通す。立ち上がったときには長時間の無理な姿勢ですっかり肩や足腰が強張っていた。培つた筋肉は見た目こそ衰えておらずとも、比較の対象が現役の海兵隊員時代で

はさすがに幾分か劣る。かといってジムに通うほどに向ふ心など全く持ち合わせていない。今日だつてアパートに帰つたら、カロリーのことなど一切気にせず冷蔵庫の中のバドワイザーを開けるのだと自ら確信していた。太陽が地平線へ近づくにつれ暑さを増す部屋は、鍵をこじ開けた時に比べむんとした熱気を孕んでいる。刺すような冷たさと苦味が喉に流れ込む瞬間を考えただけで、壁を殴りつけたいほどの高揚と焦燥に駆られた。

ドロップキック・マーフィーズの「ワーカーズ・ソング」を口ずさみ、ビルの裏口を潜る。地上は意外と涼しく、切れ切れの雲間から青空が覗いているのが分かつた。

ふと考えたのは、モーター音のうるさい冷蔵庫に見慣れた缶が入っているかという問題だった。6本パックを詰め込んでおいたのは3日前なので、正直自信がない。家に誰もいない不便を感じるのはこんなときだつた。母がいれば怒鳴りつけることで20分後には望みのものを手に入れることが出来る。怯えと反抗、たきつけられる激情。ちょっと考えれば分かる。いくら便利でも、手間を考えるといふうがいいものもあるのだ。

彼女は何も気付いていなかつた。気付いて欲しいとスリムが願うには、彼の憎悪は余りにも根深すぎた。ヘアブラシ、靴の踵。連れ込まれる男たち。不足は怒りを発散させる口実だ。手段が悪いとは全く思っていない。社会的にも有益とすら考えている。適度のガス抜きは、夜になつて仕事の終わった女と遊ぶ際、少しでも相手を怖がらせることなく楽しい時間を過ごすために必要な儀式だつた。そのような剥き身のままのむらつ氣を怖がる女を彼は好む。彼の中で、恐怖から本来の意味が抜け落ちて久しい。そう形容すべき感情は、いつでも心を慰撫した。特に、他人が催すものは。

様々な要因が揃れ合って出来たさがを本人も自覚していたが、今更矯めようと思ったことはないし、周りの誰一人として彼を正しい方向へ導く気など起こさなかつた。彼は自分の思うとおりに生きるために周囲を適応させればいいことを知っていたし、実現のため時には逆に自らを適応させる方法を心得ていたのである。

スリムは本当に我侭な男だ。

それはもしかしたらこのようにして起じたのかもしれない。

まず抜け出すのは簡単、そいつはすぐ頭のきれる奴らしいから、いくらでも方法は思いつくだろう。ここはブロードムアやアーカム・アサライムじゃない。

奴は三階南棟にある職員用トイレにある窓のサッシがガタガタで、5分も力任せに引っ張れば外れるのだということを知っていたらしい。僕だって知っているくらいだから。身を乗り出した真下は裏口の軒。コンクリートのしつかりした造りだ、上手く頭をぶつけばまあ、8割方死ねる。そう、何フィートの高さがあるかは分からないが、そんなところから飛び降りるなんて自殺行為だと看護士が小便をしながら喋っているのを聞いたことがある。このご立派な職業に就いた方は、医療刑務所に入つた人間が自殺なんて言葉に怯むと本気で思つてゐるのだ。忌々しいカトリックどもめ。でも忘れないで欲しいのは、レクリエーションルームで涎を垂らしている連中の数倍利口なテッド・バンディですら、更なる刺激を求めて裁判所の一階から身を躍らせたつてこと。ちょっと運動、たとえば小さい頃YMC Aでサッカーでもやつてたら、きっと足首を捻りもせずに上手く着地することができる。

彼もきっと昼の2時ごろ、チョッカーの相手がいなくなつて暇をしたから、ちよつと散歩しようと考えたのだと思う。白いムームーみたいな病院着は目立つから丸めて大便器の後ろにでも押し込んで、

下着一枚とスニーカーで窓枠を乗り越える。もちろん知つてのとおり裏口の傍には物干しがあつて、ぱりっと糊のきいた看護士の服が干してあるから、後はそれを着て柵を乗り越えるのは容易いことだとは「」想像の通り。僕個人の意見としては、もうちょっと有刺鉄線の電流を強くするがいいと思つ。あれくらいなら掌は多少焦げるけれど、まあ、耐えられる。

とはいっても頭のいいそいつだから、病室も町もそんなに変わらないのだと気付くのに時間は掛からなかつたんじやないか。ラガフレルド通りを歩く間ずっとドミニノ・ピザの空き箱につけ回されたり、ソフトクリームを食べてる5歳くらいのガキが「世界崩壊の序曲」なんてエンドレスで喚いてたりしたら、普通の人間だつてうんざりするに決まつて。だから通りから奥まつたところにあるアパートでちょっと休憩しようと考へた。あそこは娼婦が多い。といふが、ティンゼルタウンの南には娼婦が多すぎる。フツカーナンて最近は使わないのかも知れなけれど、あいつが言いそうなこの呼び方を僕も採用したい。端的だし、語感がいい。白人っぽい。

ああいう連中の住むようなアパートについてる鍵は見掛け倒しから、そいつも最初はそこらへんのパイプでも叩きつけて部屋へお邪魔しようとしたに違ひない。実際、一回は壊そうと試みた跡があつたとか。でも真昼間からそれは失礼だ、普通に考えて。近所迷惑だし。鍵があるなら、礼儀正しくドアを開けて入ればいいじゃないか。電気メーターの上に鍵があるつてことは空室だから、いきなり踏み込んでか弱い女性を驚かせるようなこともない。

家賃が下がれば下がるほど、住民が部屋に残していく荷物の量は増えるつていうことを恐らく奴も知つていた。何でもその部屋の床には忘れ去られた服と靴が散らばつていたそうだし、家財道具についてるガラスというガラスは全て割られていたそうだし？ テレビ

に放尿してあつたとか？ よくある話だ。目新しくも何ともない。もつともこれはハシシのせいじゃない、だつて万引きできないから。最近の売人は怖い。何か揉め事を起こしても段階を踏んで上の人に話しかけに来るんじやなくて、いきなり売ってる本人が銃を片手になだれ込んでくる。まあ僕だって、そんな仁義ある時代は噂でしか聞いたことがないけれど。

ピザの箱もさすがに階段をのぼることは無理だつたはず。だつてあいつには足がない。耳はあるけれど。僕もピザを食べたくなつてきた。最後にシカゴ・ピザに行つたのは一体何年前の話か、とにかく包丁を持つていつて、それで母さんは前の晩豚肉のプロッカを一口大のサイコロ型に切つていた。シーフードピザを一切分けて欲しかつただけなのに警察がやってきて、僕に包丁を渡せつて言つたらそななことをしたら母さんに怒られるつて言い返したらそのビル腹のポリ公はリーを押さえつけて、リーが包丁を振り回したらまたまポリ公の顔を切つて飛び上がつた隙に逃げ出したらうっかり何かぬるぬるするものを踏ん付けて転んで結局シカゴ・ピザつて赤いペンキで書いてあるショーウィンドーに頭から突つ込んでそれでも這い出して見せるのに店の周りでみんなが驚いていた。その中にはヤメロン叔父さんに似ている人がいたけどヤメロン叔父さんじゃなかつた。ヤメロン叔父さんの顔は豆鉄砲を食らつて驚いて、それから氣まずくなつて笑いながら心の中では撃つた奴に邪悪な仕返しを企むヒーリストな鳩に似ている。そんな奴、乗つてる車がぶつかつて炎上爆発して30フィートくらい跳ね上がつたらいいつて思うのに「バニシング・ポイント」とか「ダイハード」みたく激しく死ねつて中々そうはいかない。死んでるかどうか確かめるのにもう一度銃を頭へ撃ちこめばいいっていうけど、それなら最初から頭を狙えればいいのにどうしてわざわざ胸なんか撃つんだろう。ウージーってそんなに命中精度が悪いんだろうか。撃つたことがないから

分からない。いや、もしかしたらあるのかもしれないけれど、いちこの銃は何だってテキサスレンジャーみたいにこだわったりしない。弾を買うときも拳銃を店へ持つて行ってこれに合うのって言えばいい。買い物は効率よくしないと。最近仕入れてるスーパーでマッシュルームが高いって食堂でスープをよそう係の男が言つてたけれど、彼の名前が思い出せない。ジーノだったか、ライバックだつたか。ケイシー・アンソニーが出所したとか、世の中は本当に酷いことが多い。何にせよ、よちよち歩きの赤ん坊が死んだっていう事実は事実なんだから。推定無罪だろうが有罪だろうが、検察側の証人の父親……が、どうしてもつて言うから僕は結局あれを舐めた。苦かつたし、吐きそうになつた。頭がくらくらした。3歳の子供になんてことをさせるんだろう。そう、生のままの、ジンなんて。兄さんがイラクへ行く前行つた何て名前かとにかくイタリアっぽいレストランでギムレットを飲んでいたけれど、フイリップ・マーロウじやあるまいし、さよならを言つのは、少し死ぬこと、いや結局死ぬ気もない。兄さんのことを言つたなんて。どうでもいい。どうせ僕のことなど茶色い毛並みで尻尾が細い小さなネズミくらいにしか思つていらない。僕は疎外されている。彼の生活からもしもを扱いて実際に僕が割り込んだら……無理がありすぎる。自分の事で手一杯なのに、これ以上欺瞞を抱えきれるわけがない。結局僕はこのままここですつと、いや、ここでずつと、僕は僕の人生を終えるしかない。まるで終身刑。それも悪くない。騒いだつて始まらない。それにどうせ。

奴が管理人に　名前はどうでもいい、興味なんかない　手をかけた理由は、お決まりの快楽由来だと僕は推測する。僕の推測だ。驚いて襲い掛かつたつていう性善説に固執したいならそうすればいい。野生の熊だってハイキングしている人間を襲うときは、その大半が敵意じやなくて恐怖から相手を張り倒すつて言うし。けれどパ

ニックに陥った人間はリムジンのホイールキャップで殴りかかるような真似はしても、その後昏倒した男の首に思い切りそれを突き刺して切断しようとはしない。いや、刺さりもしなかったのか。仰向けの体へ跨つて、喉仏にホイールキャップを当てても、血と汗で滑る皮膚のお陰で何度も傷んだフローリングに鋼鉄が当たるだけ。結局諦めてダクトテープで手足を縛りつけた後、どうしたか。写真でも撮ろうと思ったが、まさかそんなことは。ちょっと火あぶり位にはしてみようと思ったが、それは僕も否定できない。何故ならその部屋には半分くらい使つた跡がある「レッドスナッパー・ダイニング」のマッチが転がっていた。それに、薄暗がりの中転がされて芋虫みたいに跳ねてる男は何となくベトナム人みたいな顔だった。ベトナム人は焼身自殺が好きだつて、昔何かのドキュメンタリーで言つていた。

そのうち意識のしつかりしてきた男が、大声で喚き散らしたのは想像に難くない。「たすけてああたすけて」なんて甲高い声を出されたら隣の部屋にも聞こえてしまう。だから窒息寸前になるまでダクトテープを口にべたべた、狂つたみたいに首を振るから一発顔を殴つてから馬乗りになつた両膝で男の喉下を締め付けて、二重、三重、四重。何だか芸術的に感じて眼にも、頬にも、終いに手当たり次第貼り付けていつた。頸動脈が今にも爆発しそうなくらいぴくぴく脈打つてるのが布越しにも太腿へ感じる。さぞかしいい気分だつたろう。人間が殺されそうになつたとき、抵抗しようと一番動くのは？ 実は腕じゃなくて腰から下。いくら汚いスニーーカーが滅茶苦茶に床を蹴つても、上半身に乗り上げた犯人を撃退することはできないのに。その男も、きっと。そんな様子を見せたら、奴が一層興奮を煽られることなんか知りもしないで。火あぶりだけじゃ面白くないから、ガラスでもまぶしてやろうか、包丁はないか。塩酸が欲しい。頭がカツカして、胸がわくわくして、無性に唇の乾きが気に

なつて何度も舌で舐めたくなる、そんな気分になる。

しつこじょうだけれど、これはあくまでも仮定の話だ。実際の犯人がどんなことを考えていたかなんて僕は知らない。空想を長々と、無意味だと笑うかもしれない。無意味な生、無意味な死。けれど現実だって、無意味だと思うことから意味のあることを見つけないと、人間は退屈と絶望で死んでしまうに違いない。

その作業過程が快樂つて奴で、そういう意味では僕なんか、一級の快樂主義者つて言えるかもしれない。

男は助かった。生きよつとする努力は無駄じやなかつたつてことか。この国は、私立探偵の免許取得に関してもうちょっと規制すべきだと思つ。あの暗いブロンンドを思い出しただけで吐き気がする。犬みたいに血の匂いを嗅ぎつけてくるその能力は脱帽というほかない。いや、実際に昔は官憲の犬だつたらしい。あの手錠なんか、退職して以来返していないんじやないか、公用の物品の私物化なんて。買う金を払つてるのは一般市民だつて言つのに。

ああいう奴は想像力が欠如しているから、平氣で人を走つている車から門の前に投げ出したりする。もう一度柵を乗り越えて、服を洗濯籠に投げ込んで、雨桶をよじ登つて、トイレに侵入する人間の苦勞なんて何も考えちゃいない。途中で窓枠のささくれが思いつき掌に刺さつたりして。掴まれた襟首と一発腹に食らわされたパンチは堪えた。とそいつも思つてるだろう、今頃。

つまらない、本当につまらない。こればかりは無意味でしかない。いくら僕でもそれくらい分かる。

昼間ももう少し巡回の回数を多くしないと、今度は本当の死人が出るかもしれない。これも仮定の話。実際どうだなんて、僕に聞かれても分からない。頭のおかしい人間に、これ以上のことを聞くのは馬鹿だ。こんなところで辛抱強く時間を潰しているくらいなら、もっと建設的なことをすればいい。

なぜなら「かもしだれない」なんて言ってられるうちが華で、「今」がやってきた瞬間、気付けばその首にはナイフが突き刺さっているかもしだれないのだから。

溺れる直前で眼が醒めた。瞼を開けた途端ランダムに選ばれた夢の断片が白い天井へ消えていくのをはつきりと感じ、冷や汗が止まらない。残った部分だけでも恐怖を感じるには十分だった。つるはし。長い髪。そして闇。グロリア栄光と程遠いどん底の世界。暗黒などには怯む必要もなかつた。見えなくてもどこに落ちるかは分かる。知っているのに手をこまねいているだけしかないという事実が、何よりも恐ろしかつた。

コックを捻りシャワーを止める。体を流れ落ちた最後の水滴たちが排水溝へ流れても、ダリルはバスタブに頭を預けたまま天井を見上げていた。もやが掛かつたままの思考は昨夜の残滓を辛うじて残している。そのまま寝入つてしまふなんて。疲れていたわけでもないのに。いや、体こそ疲弊していないものの、心は履き古した靴下のようによれています。昨日は消えた女を追つて一日中街の東側を歩き回つた。流れるブルネット、雑踏に埋もれる記憶と存在。見かけたとの情報を聞いたのは4日前だつた。3日間は外した。だがダリルはその日の朝、今日こそは彼女を発見できると根拠のない確信を抱いていたのだ。

確かに女はいた。まだ口も落ちきっていないのにプールバーでピンク色の甘い酒を飲んでいた。探していたのとは別の人間だつた。彼女が傷んだ黒髪とゴールドの爪で品のない誘惑を仕掛けてきた時、ダリルは情報を流した人間へ恨みをぶつけに行こうと決めた。

軋む節々に顔を顰めながら、額に張り付くダークブロンドの髪を

搔きあげる。ドアまでの道のりを見遣ると、くすんだタイルの上には入ってきたときそのまま、脱ぎ捨てた服が「こぢやこぢや」と散らばつていた。立ち上がったとき、また少し腹に回った贅肉を見下ろす。分署にいた頃ならば、地下の備品室横にあるジムを利用できた。だが定期的な運動をやめた途端、太りやすい彼の肉体は続々と余計な脂肪分を蓄え始めている。誰かに責められる気がした。でも責められないことは分かつっていた。

髪を剃った後に含んだリストリーンを、いつもよりも長い間口の中に溜めておく。アルコールとミントのお陰で口の中は弾けそうだが、それとて脳に至る神経のどこかが詰まっているお陰で期待する効果を発揮しない。いくら柔らかい粘膜が痺れようと、視界にノイズが入っているような感覚は一向に消えなかつた。

四隅が曇った鏡と向き合つたとき、そこに映つているのは窓の外に佇む寂れたビルと、典型的な30男の姿だつた。眼を腫らし、もみ上げから顎にかけての肌がぶつぶつしている。だがみつしりと肉の付いた二の腕は、まだまだアンクル・サム的たくましさに溢れている。捨てたものではない。それでいい、今のところは。過去と現在を比べることを、彼はできるだけやめるよつ心がけていた。

一通り命題から結論までを組み立て終わつたら、後は成すべきことに向き合つだけだつた。必要なのは、しゃきっとして身なりを整え、部屋から 事務所兼住居の薄汚いホテル・ガリオンから出ること。首を傾げ、むくんだ顔を出来る限り鏡のくもりから遠ざける。夜は明けたばかり。課題はあれど、一日を良いものにする鍵はまだなくしていなかつた。そのためにはまず、頭を動かなければ。鏡に映る全てを強く睨みつけながら、ダリルは口腔内で徐々にぬるさを孕んでいくリストリーンを飲み下した。咽頭から食道へ、染み込むように刺激が広がつていく。鼻と眼の奥が燃え上がる感覺に、昨晩から持ち越した怒りが再び鼓動を打つた。何としても、不確か

情報をちらつかせた連中に挨拶しなければ気が済まない。例え相手が神に仕える身であろうとも。脳の回転が加速すればするほど、憤懣は熱を持つて身体へと擦り寄ってきた。引っ掛けでおいたタオルで顔を乱雑に拭うと、ダリルは足音も高くバスルームから抜け出した。

後からやつてきた違法駐車の群れと薄汚い雑居ビルに囲まれ、チャーチ通りという名の由来となつた聖ポロヴィニア教会は、こぢんまりとした外観を一層小さく見せている。にも関わらず、ヨーロッパの寺院をそのまま移し変えて改築したような建物は、臆することなく自らの異質さに胸を張っていた。庇に据えられた山羊の頭を持つガーゴイルが、礼拝者の持つ疚しさを問い合わせすよう仰々しく見下ろしている。ゴシック様式の変形版ともいうべき分厚い石造りの壁は、本来広く開かれた存在であるべき教会にどこか閉鎖的な空気を醸しだしていた。

よく磨かれた重厚な木製ドアを潜り、ダリルは静まり返った礼拝堂内を見渡した。長椅子に腰掛ける信者たちはちらほら見受けられるものの空気はまだ朝の鋭敏を保つたままで、ちょっととした溜息でも点された蠟燭の火が搔き消えてしまいそうだった。

やたらと高い天井などお構いなしに籠るかび臭さへ好意を抱くことは一生ないのだろう。高窓は大きく、聖母をクロテスクに描いたステンドグラスがはめ込んであるものの、建物の内部は明るさという言葉とおよそ無縁だった。隠しただけの気鬱が再び鎌首をもたげる。胸を圧迫する苛立ちに促されるまま身廊を突っ切ろうとした時、ことんと小さい音が背後で響く。

空のバケツを床に降ろして跪いたスター・ジョイスを見下ろし、ダリルは露骨に侮蔑的な表情を浮かべた。

「亭主は？」

「主は天に」

十字を切つて立ち上がった尼僧から怯えを取り去れば、何もなくなってしまうだろう。本人が上手くかわしたつもりだと思っている問答を紡ぐ唇は、哀れを催すほど震えていた。正面の青い眼を見つめ返すことすら出来ず、顎を喉元にくつ付けたままバケツを取り上げる。

「何か御用ですか」

「アルクインはどうだ」

「外出中です」

教会を取り仕切る男の名前を出した途端、ジョイスの頬へ僅かに赤みが差す。不健康そうな肌色に血が上つたとき、この女がそれなりに整つた容姿であるということが初めて分かる仕組みになつていた。普段は長身を恥じるように背中を屈め、紅茶色の瞳を常に伏せている。今も視線は床に落ち、それなのにビコヘぶつかるでもなく身廊を横切つしていくのだ。

「忙しい方ですから」

「朝早くから大変だな」

広がる衣の裾を踏まない位置にぴったりとつきながら、ダリルは眼を細めた。

「待たせてもらひだ」

「今日は夜になるまでお帰りにならないと思います」

裏手まで付いて来そうな気配に焦れたらしい。振り返つた瞳は、いつも憂いとは別にはつきりとした拒絕を含んでいた。

「神父様が何をしたというのです」

「ガセの情報を掴ませやがつた。ニーナ・ウイロックス、16歳の女が家出した。あなたの神父さんは教区巡回中、『ケーブル・ガイ』

にいるその小娘と喋つたって確かに言つたぞ」

「あの方がそう仰つたならそうなんでしょう」

「見事に人違いさ。写真も見せて、名前も聞いたってお墨付き、しかもコンテンツ量はお布施の50ドルって、あいつの説教と同じで

大したペテンだよ」

きつ、と音がしそうなほど、ジョイスは眼の前の顔を強く睨みつけた。

「ここは神の家ですよ」

使い古された常套句を吐く唇の持ち上がり方は、神に身を捧げている人間が見せていいとは到底思えないほど反抗的だった。覚えた既視感に、掌へ爪が食い込む。

「もう少し言葉を」

「宗教問答をしにきたわけじゃない」

こみ上げる怒りを噛み潰し、ダリルは唸つた。

「事実を質しに来ただけだ」

「あなたはいつも事実を捻じ曲げるのですね」

浮かぶ清い哀れみが、色とりどりのガラスを通して差し込む光にぶち当たって奇怪に変形する。

「奥様のことだって」

「黙れ」

鋭い言葉は低かっただが、まっすぐ続いた身廊を一直線につき抜けた。椅子に腰掛けていた老婆が一人、驚いて振り返る。睨みつけてやれば渋々と元に向き直るが、これでまた一つ哀れな信者の、そして教会の被害者意識が持ち上がったことは手に取るように飲み込めた。迫害される宗教、不遜な現代人に無体されて。神に愛される資格などないとは分かつていたが、負けることだけは許容できなかつた。

「あんたが神父とやつてることと、どっちが罪深い?」

戦慄が作る沈黙の中に逃げ込んだものの、見開いた目はやはり雄弁だった。コルネットから零れた瞳と同じ色の前髪が一房、強張つたこめかみを隠している。沈殿した怒りをどこまで叩きつけて良いものか。意識した以上に険しくなる口調に余計苛立ちながら、ダリルは女の眼を覗き込んだ。

「いいか、お互様なんだ」

焦点は合つておらず、既に逃避の態勢に入っていることは分かつた。だが伝言を託すぐらいは可能だ。

「最初から分かりきつたことだろ。やるべきことをやるだけだつて。別にあんたらのことを責めちゃいな」「

「許しの心を持つてください」

今にも消えそうなほどやらゅうとした口ぶりでジョイスは呟いた。「奥様を許してあげて。そうすれば貴方もきっと救われます」

「そんな話をしに来たんじゃない」

肩を掴んで揺さぶりたくなる衝撃を懸命に抑える。

「俺が知りたいのはアルクインの居場所で」

「貴方は本当は優しくて良い人でしょう？　あれ以来、だれの命も奪つていらない」

「もういい。電話するように言つてくれ」

声を荒げなかつたことが奇跡だつた。握り締めた指の関節が白むほどの力で、ようやく憎悪は抑えられる。ぶつけるべき場所はここではない。理性が叱責する。いつからか、自らの声は神以上に厳しく強固にダリルの心を戒めるようになつていて。搖らぐことはある。だが崩れることはもう一度とない。教会の聖なる罰当たりにも、無差別にアパートの管理人を殺すサイコにも不可能なことを、見えない神や悪魔にできるはずがない。

踵を返したら、今度は避けていたはずのジョイスが追いすがつてきた。外れかけた取つ手が、ブリキのバケツにぶつかつてかたかたと音を立てる。

「今度、来てください。貴方は嫌うかもしれないけれど、その、問答をしに」

「何のために」

「必要な気がします」

一つの黒い影になつた女の上田遣いは、今から折檻に進んで身を晒す殉教者のように。幾分鼻白んだ顔を見ても、彼女の中にある懸命さは揺らがなかつたようだ、珍しいことに。

「何故かとか、何のためにとかは、上手く言えません。でも貴方はいつも、自分の中に抱え込んでしまうから」

「丸裸にされてソースを掛けられるのはごめんだ」

「べなく切り捨てるに良心の呵責がないとはいえない。だがそれは、彼女が望んでいたものではなかつた。精一杯張り詰めていた勇氣もとうとう撤退し、ジョイスはまた最初と同じように頑垂れてしまつた。その場で根を張つてしまいそうな重い果敢なさが、頭の天辺からつま先にかけてまでを貫いている。そのまま放つておくのはどうかと考えるもの、義理はないのだ。はつきり言うと、面倒くさい。既に頭は次に向けて切り替わつていい。この女が余計なことを言わなければ、30秒で移つて新らしい行動に。」

「連絡を頼むぞ」

それだけ投げつけると、ダリルはやつとのことで気に食わない場所から去ることに成功した。

手札がなくなつてしまつたといつ現実は厳しい。だが逆に考えれば肩の荷は降りたと言える。忌々しい聖職者の手助けで報酬を得るのは、彼にとって一種の侮辱だつた。えらそうな事ばかり言つて、全てが嘘つぱち。光古臭い教えでは何も救えない。落ちるばかりだ。ジョイスも、そしてグロリアも。

街の南を一巡して帰る形になつたため、気付けばホテル・ガリオンのシックな看板が見えていた。バスルームの窓が開いている。今朝あれだけ未練たらしく居座つていたのに、気付かなかつたなんて。自らの失態にダリルは舌打ちした。

ホテルの隣に聳える廃墟は普段、悪ガキどものレクリエーションと憩いの場として活用されている。彼らは朝が遅いから、9時を回つたばかりのこの時間帯は騒がしい歓声も聞こえてこない。スプレ

一缶の下品な落書き、甘ったるいシンナーとマリファナの匂い。幾つか入ったテナントも土地柄に恐れをなしてすぐ引き上げられ、今では宝の持ち腐れ。いかめしい灰色の外壁はくすみ、手入れが成されていないせいで劣化するのも早かつた。

外装が汚れるのと同じくらいの速度でダリルの手から栄光^{グロリア}が零れ落ちたのは、このビルが落成される数ヶ月前のことだつた。幾重にもコンクリートが重ねられる予定の土台は思った以上に乾いておらず、靴に尖った顆粒を付けていた。セメントを攪拌する機械の音だけが夜の闇に重く響く。保護シート越しに見た月は今にも雨を呼びそうにくつきりと近かつたことを、ダリルは昨日のことのように思い出すことができた。

泥にまみれたグロリア。沈んでいくグロリア。それでも何より美しいグロリア。

その冷酷を許せないのに、打ち砕いてしまつたのは自らの手なのに、ダリルはあの感触を未だ忘れていた。

こんな汚い通りでも日は高くなり、冬物のステッジの下に汗が滲む。いつの間にか止まっていた足を持て余し、立ち竦む姿は、先ほど震えていた尼僧と何一つ変わることがない。それを知っているからこそ、ダリルは自らの感傷を許せなかつた。見上げていた建物が鈍く輝くのから無理やり視線を引き剥がし、再び歩き出す。ホテルに帰ろうと思っていたが、このままもう一度街の東側へ向かおうと今決めた。二ーナ・ウイロックスの家族は、娘の帰りを待ち侘びていることだろう。例え再会したとき、ヤク中になつていようとも、とんあばずれになつていようとも。出来る限りマシな状況のうちに少

女を掬い上げ、それでも愕然とする親から金を奪り取らなければ、今月の家賃が払えない。ゴミ箱を漁る際、明細書のついでに傷んでいない残飯を選別する羽目になるのはじめんだつた。そのためには動かなければ。足と頭をフル回転させて。彼は生きている。自らの体が動かなくなることを、思考が停止してしまうことをただ恐れていた。

いつかは立ち止まるよう肉が命じ、魂がたゆたいに流れる瞬間が来るのかもしれない。その先にあるのは、自らの罪を償うための時間だと、はつきり彼は理解していた。

白い肌はまるで雪のよひ、揺る栗色の髪も豊かにうねっている。貞淑な美貌は勿論、その下にくつついている肢体も適正な食生活と日々の満足感によつて柔らかに輝いていた。極め付けにぴったりと身体に張り付いた若葉色の縄が、身じろぎにつれざめき煌く。女神だ、と本氣で思った。だがどれだけの幸福の持ち主にも時間は対等に刻まれ、タクシーがくる時間は刻一刻と迫つている。セットした髪を片手で押さえながら懸命にドレスを引き下ろす姿は、普段ならば十分愛しさを覚えることができるだらう。だが今では、美点と背中合わせになつた欠点は逸る心をやみくもに急き立てるばかりだつた。焦りが欲情を凌駕した瞬間、ソロはブランチの足元に跪いていた。

「不器用だな」

乳房の下でたぐれた布地を引っ張る。無造作な手つきと揶揄の言葉には慣れていたはずのブランチも、今回ばかりはむつと唇を引き締める。

「あんまり強く引っ張らないで。これを着て行かないと、おじいさまが悲しむわ」

「はいよ」

こんなにもタイトなドレスなのに、お行儀の良い彼女は下着を身につけていた。一般的なデザイン、裾の部分に纖細なレースがあしらわれている。それでもいいし鼻を近づけても洗濯しそぎた布特有の清潔で酸っぱい匂いはしなかつた。薄く柔らかい陰毛が透けて見える。脱いじまえよ、と言つてしまひたかったが、さすがにこれ以上の状況悪化を煽る気にはなれない。鼻先の布一枚隔てた場所にある股間へ目もくれず、ソロは滑稽なくらい慎重な手つきでシルクを下ろしていった。

「爺さんはあのミルトン・イーリング・カンパニーの会長、自分は

絵本の「コーティネーター」で、料理は最高で可愛くて頭も良くて性格もいいのに、どうしてこんなことが出来ない？」

「私は嫌だつて言つたのに」

聰明な内面とは裏腹のほんやりした表情でブランチは呟く。

「こんな服、恥ずかしい」

「似合つてゐるのに」

本心からの言葉を真上の胸に捧げる。勿論笑顔も惜しむことは無い。

「ミスター・ミルトンは嫌いだが、彼のセンスに関しては全面的に賛成だ。こんな素晴らしい孫を作り出してくれたことも感謝してる」

「駄目、駄目よ。今日は悪口はなし」

短い黒髪の上に、ギリシャ彫刻よりもずっと纖細な指が降りてくる。

「余計緊張するじゃない」

「忍ぶ愛の辛いところだよな」

含み笑いと共に、遠慮がちな手へ自ら頭を押し付ける。4年の付き合いを経て、箱入り娘はようやくぎこちない愛撫の手法を身につけ始めていた。それでも残る初心者は、恐らく一生消えないのではなかろうか。犬でも褒めるような手つきに浮かぶのは苦笑いだが、心はじんわりと温かさを帶びていった。

広いコンドミニアムの中は音楽の一つも無く、通りの喧騒とも無縁だった。聞こえるとすれば一人の息遣いくらいで、それにしたつて自らが息を止めてしまえば、ブランチの穏やかな吐息などあつといつ間に静寂へ呑まれてしまうだろう。実際ソロは息を詰め、慎み深い腰骨の出っ張りに取り組んでいた。皺一つ作らないという決意のもと、そつと指で布地を摘まみ、引っかけたり爪を立てないよう用心深く滑らせて行く。皇かなシルクは確かに極上の手触りだが、この下に隠されているしつとりとした肌の方がよっぽど欲情を煽る

ことは間違いなかつた。擦れ合つ柔らかさが指の腹を伝つて口の中を乾燥させる。ぐびれた腰から掌を這わせ、悪戯に親指で臍の辺りを撫でてやれば、呻き声と共に髪の毛へ圧力が掛かつた。

「時間が無い……」

「まだ15分あるさ」

「でも一回脱いで、また着るなんて絶対無理よ」

珍しい艶を含んだ冗談も、促すために嫌々口にしたものだらう。見上げた臉は緩く閉じられ、眉根も微かに寄つてゐる。こんな角度からこんな表情。彼女が下着を身につけているという事実に違和感を覚えてしまふほどだつた。はつきり言つて、ソロは最近ご無沙汰である。ブランチの部屋を訪れたのも一ヵ月半ぶりで、よく発狂しなかつたものだと自分でも驚くほどだつた。敏腕で鳴らすだけあり、この街の検事はなかなか尻尾を出さない。『ミニ袋の中身は豪華な残飯とマジックで塗りつぶした拳句修復不能なほど切り刻まれた明細書。安い赤外線カメラも遮光カーテンには歯が立たない。業を煮やして退出時に突撃をかましたら壁のような運転手に追い返された。対抗心と好奇心をくべて火力を保つていられたのも三週間まで。結局、ヘッドラインは普段通りの大きさで印刷された。』『白い検事、黒い噂、真つ赤な嘘！』少なくとも志だけは高かつたと、いつもどおり自らの傷心を慰める。それだけでは虚しくなるばかりだつたので、結局ここに足を運んでいた。よりもよつて、来ないでくれと二ヶ月も前から忠告されていた日に。連絡の一つも入れなかつたことも、確信犯であることも全て見抜いた上で、ブランチは悲しげに眼を伏せた。だが追い返すような真似はしなかつた。ショーツ以外に唯一身につけたものであるパンプスに落ちたヘーゼルグリーンの瞳はいつにも増してけぶりを増している。外出48分前に服を身につけていないなど、全てを律することで自我を保つてゐる彼女について許されざるべき出来事だつた。

駄目押しをするように畳み掛けるお人よし具合は、介助を受け取つてゐる今も端麗な面差しに憂いを滲ませていた。

「よし、後ろ向いた向いた」

考え方でもしていたらしい。腰を掴んで半回転させれば驚いたような表情を浮かべるが、結局なすすべも無くその形良い尻を男の前へ突きつける形になつた。

「な。こんな時に親愛なる隣人がいてよかつただろ?」

「ええ、ごめんなさい」

俯いたときに現れた頃に鬱血痕でも残したら、スキヤンダルの製造と暴露を一人で行う羽目になる。尻なら見えないから、ちょっと位歯型をつけて大丈夫だろうか。詮無きことを考えながら、尾？骨の終点を煩惱ごと裾で覆う。蟠る布が吸い付くように肌へ重なつていく間、ソロは余計な部分に一切触れなかつた。

「「めんなさい」

落ちてきた吐息の重みに、思わず顔を上げる。こちらの眼を見ることすらできず、ブランチは田の前にある鏡台へ手を伸ばした。

「行きたくない」

落ち着いた上品さを醸し出すコンドミニアムのインテリア中、唯一口ココ的派手さを持つ鏡台は、曾祖母の代から伝わる由緒正しい品だといつ。よく磨かれたマホガニーの天板に乗つていたのは、保管場所に見合つ高級なビロード張りのケースだつた。

サテンのクツショソヘ突き刺さつていたものに、さすがのソロも目をむく。垂れ込む醜聞の代価としてゲイバーのNO・2に迫られた時でも、ここまで脳細胞はダメージを受けはしなかつた。

「先週渡されたの。いつでも返してくれて良いからつて。でもおじいさまは彼の事をすゞく気に入つてて」

一本指に摘み出されたプラチナの指輪は、恐らくティファニーだらう。ダイヤが一粒埋め込まれただけのシンプルなデザインが、逆に恐慌を搔きたてた。敵は彼女をよく知り、なおかつ尊重している。引きつった唇は幸い見られていない。大きく息を吸い込み一端止

めてから、溜め息に混ぜて言葉を吐き出す。難儀な交渉の場で余裕ぶつているふりをするとき使う手を、いま使わねばならないことが悲しかった。

「相手は誰だ」

「ジョン・ハグリー……ハグリー・ペットフードディイックの開発部長」少し迷つてから付け足された「いい人よ」という表現が、それ以上意味を持たないと分かっている。それでもソロはスカートの裾を握り締めていた。寄つた皺にあわせて、光沢が不快な程めまぐるしく変化する。

「いい人ね」

むき出しの肩が強張つたことで、混乱に怒りと痛みが加わる。

「どうして俺に相談した？」

「いい機会だから」

所在なさげに動いていた爪先はいつの間にか深い毛足に絡め摑られ、動きを止めていた。

「運命なんて信じないけど、今日来てくれたのはある意味、偶然じゃないのかも」

元来それほど口のまわる性質ではないが、今のプランチはいつにも増して言葉を選ぶのに躊躇している。次に来る内容を予想しながらも、ソロは辛抱強く耳を傾けた。

「一緒に来て、おじいさまに会つて欲しい」

「無茶言つなよ」

すぐさま打ち返された否定に唇が引き結ばれたのは、斜め後ろからでも見ることができた。

「そんなことしたら勘当どひびきや済まないぞ」

「別にお金なんか

「耐えられるのか？」

いつもからかわれるさりげない気品は、彼女に嘘をつくことを許さなかつた。正確には嘘と言えないのかも知れない。生まれてこの方経験したことの無い事態など、予想できたほうがあかしいのだから

返答の代りに、ブランチは閉じたケースを強く握り締めた。

「じゃあ、来年になつたら…… 40になつたら来てくれるの？」

「なあ、俺は爺さんがよそに女を囲つてることをすつぱ抜いた男だぞ。旗振つて迎えてもらえると思つか」

「卑下しなくともいいのに」

「してないよ。思慮深いだけで」

「きつともう気付かれてる」

「紳士協定つて奴さ」

再び肌の上を通りだした縄の道のりは、心なしか先ほどよりも安易なように思えた。程よい大きさの尻はもう半分近く隠れ、肌寒さに粟立つていた染み一つ無い肌も平穏を取り戻している。

「口にしたが最後、大噴火」

「一体どうするの。ジョニーと結婚を？」

喘ぎは涙の代替物だった。彼女は滅多なことで泣き声など漏らさない。その強さを慈しみたいとソロはいつでも思っていた。だが今は耳が馴れ馴れしい呼称を拾い上げて、もどかしさの中に黒い染みを落とす。

「やけに親しいんだな」

「大学生の同窓生だから」

「ハグリー家ね」

浮かんだ嘲笑を見逃さず、ブランチは頬を紅潮させて振り向いた。静かに燃えて色みを濃くする虹彩に見つめられた途端、今までソロが立つていた場所は途端に均衡を崩し、取り返しのつかない場所へ落下していく。頭では理解しているのに、唇の歪みをとることなどうしても出来なかつた。

「今時あるんだな、そんな政略結婚」

「真面目に聞いてる?」

「もちろん」

「どうしたらいいの」

「自分で決める。いつでもそうして来たら」

「そうね。好きなようにやらせてくれたわ。クールに気取つて滅多に無い感情の奔流が、塗られたばかりの紅を湿らせる。

「彼と結婚するって言つたらどうする

「したいのか」

「答えて」

「重大な選択をあてつけで決めるのは賢くないぞ」

「あてつけじゃないわよ。そういう道もあるってだけで」

「どんな道だ？」

表情筋に浮いた冷たさに引き換え、感情はひたすら臨界点を目指して回り続けている。ただでも寝不足で全身が熱っぽい中、脳みそが浮腫んでいるのではないかと思つほど沸騰し、理性がじわじわと焼き尽くされていく。

「ハグリー夫人になつてカンガルーの肉を輸入するのか？ グリーンピースのシンパの癖に」

「カンガルーなんか使つてないわ」

「犬の餌なんかみんなカンガルーだよ。オーストラリアまで買い付けに行つて三食バーべキュー、アボリジニ雇つて女主人か」

「落ち着いてよ。私が聞きたいのは一つだけ」

「いいか、俺は別にカンガルーが嫌いなわけじゃないしあまえがクー・クラックス・クランに寄付してようが文句は言わない。そのジヨニー坊やつてのも悪い奴ぢやないんだろう。だがおまえがそんなブラフで人を試すようなことするから怒るんだよ。おまえだけはそんな下らないことするような人間ぢやないつて思つてたからだ。奥ゆかしいのは結構、近年稀に見る素晴らしい美德だな。けど指輪を受け取るようなお付き合いになるまで何も言わないのはどういうア見だ」

「だつて貴方、忙しいでしょ」

「忙しくても何でも、言えば飛んでくるぞ、こんなとんでもない事態になつてるなら。大体今日俺が来なかつたら、ずっと黙つてたわ

けだら。押し切られたらどうするつもりだつたんだ。男は怖いんだぞ。ましてやカンガルーを虐殺する奴が女の服一枚剥ぐのに躊躇すると思うか。絶対しないね！ どうしてお前はいつでも自分一人で抱え込もうとするんだ。俺にしなくてもいい、嫌なら友達にでも…

「結婚すればいいの、しちゃ駄目なの？」
「するな！」

ぐつと息を詰め、大きく吐き出す。その動作を行う1・5秒の間にブランチが浮かべた表情は怒りだった。静かで、ひたむきで、強くて、全てを包み込むような。そしてソロはなぜか、この表情を見た途端、暴れ狂っていた感情が戻いでしまったのをはつきりと感じていた。

静まり返つた情動の上にやつてきたのは、らしくもない厳肅な喜悦だつた。

「分かつた」

指輪をケースに戻したブランチは、もうほしれない溜息などつかない。身繕いが完了するまで、いつものように茫洋とした瞳で、鏡に映る自らの顔を蔑んでいる。

「最初から断る気だつたもの」

もしかしたら、という疑問はすでに慣れきつたもの。別に構わないとソロは思つていた。不幸にして心配が的中したとしても、それは彼女の演技上手を立証する根拠の一つでしかない。第一、まだ操縦桿は彼の手にある。少なくともそう思わせるよう、ブランチは努力を続けている。

「挨拶なんかしなくてもいい」

立ち上がったソロの顔を見上げ、ブランチは氣弱としか表現できない笑みを浮かべた。

「本当に来ない？」

「やめとく。ジョニー坊やを殴りたくない」

ソロも真似をして微笑んだつもりだったが、結局出来上がったのは似ても似つかない唇の歪みだけだった。

「代わりに奴のホモ疑惑をでっち上げに、今から本社を尋ねるとするよ」

「やめて！」

笑い声と共に胸を押す手に促されるまま数歩離れる。改めて、自ら飾りつけた美しい姿を鑑賞した。フヨンディの黄金色パンプス、すらりと伸びた脚。膝丈で慎ましく終わつた若葉色のシルクドレス。開いた胸元の眩しさと、控えめな鎖骨。すっとたおやかな首を囲むように流れる栗色の髪。そして羞恥と困惑が典雅に交じり合つた微笑み。似合つてないでしょ？ ヘイゼルグリーンの瞳が問い合わせる。答えはノーだ。何が間違つていようともこれだけは言える。無精ひげの伸びた顎に指を当て、ソロは溜息をついた。間違いなく女神じゃないか、ここにいるのは。

掛け時計に視線を走らせれば、タイムリミットを3分過ぎていた。部屋の外にタクシーが待つているのかソロには分からなかつた。ましてやブランチが気付いているかなど、あずかり知るものではない。ただ眼の前で羽のように瞬く睫毛は、時を超えてしとやかに、優雅に男を招き寄せていた。

彼女の性質からして、遅刻など言語道断。いつそのまま無断欠席に追い込んで、とことん動搖させてやりたい。腹いせ交じりの、決して実現することの無い妄想を楽しみながら、ソロは完璧なルーチュを少しでも乱すために自らの唇を重ねた。

タイトルロールもクレジットもないことから分かるように、それは素人がデジタルカメラで撮影したフッテージだった。女が画面の真ん中に陣取つていてる。現代的な顔立ちに、おろしたてとは言え真っ白なスリップなど似合わない。こんがりと黄金色に焼けた手足が違和感を余計に煽つていた。舞台は地下室らしいが、場所は特定できない。家具らしき家具はなく、コンクリートの無機質な薄暗さが彼女の輪郭までも侵食している。暗闇の中目ばかりを異様に光らせ、女はそこに存在していた。唇の動きがあるものの、声は一切聞こえない。カメラに向こうの人物と喋つているのか、視線が正面に定まるることは無い。

シーンが切り替わる10秒前に、ふと思い立つたように口を開む。レンズの向こうをじっと見つめる瞳は、まるで知性を感じさせない動きでぱちくりと瞬く。ここで初めて彼女の眼が、青か、それらしい色であることが分かるのだ。再びカメラと対峙した女は、取つけたかのように手を振る。笑みも白々しい。だが、それなりに美しい。ふつんと映像は途切れ、数秒の闇。

場面は変わり、病院の処置室らしき場所が映し出される。断言が出来ないのは、部屋にある全てのものが新聞紙で覆われているからだつた。壁、窓、医療機器らしい大きな塊。床はおろか、診察台すらもよくみれば黄ばんだ紙を敷き詰めてある。個性という個性を徹底的に排除した室内で唯一剥き身の存在であるのは、その上に横たわった女の身体だけだった。日焼けの甲斐なく右腕は青白く、床に向かつてだらりと垂れ下がつていた。勿論、変化しているのは腕の肉だけではなかつた。真上から当てられたライトの光が強すぎるせいもあるだろう。だが切り裂かれたスリップから垣間見える肉体は、病んでいるかその先に進んでしまつた肉体特有の浮腫みに冒されて

いた。

画面の外から現れたのは、フランケンシュタイン博士かナチスのマジドサイエンティストといったところ。体格で、男だということは分かる。古臭い手術衣と大きなマスク、白いキャップまで被っているお陰で顔は分からぬ。ゴム手袋をぱちんと弾く茶目つ氣とは裏腹に、アルミのトレーに並べてあるメスを掴んだ手は一切躊躇が無かった。仕事が始まる前に、カメラは女の身体を上から下にパンしていく。これまた時代掛かった麻醉吸入のマスクのせいで、女の顔は殆ど覆われていた。ぼかしも一切入らず、濡れたような髪から爪先までを辿る。弛緩した肉体。相変わらず音は無い。

まず医師は、一見何の症状も窺えない女の左手に着目した。ズームされた薬指の根元にメスを当て、ソーセージでも切るかのようにごじごじと動かす。血はにじみ出るようになれるだけだがその量は多く、新聞紙を赤く染めていく。骨に達した時は力を込め、後はそのまま押し切るように刃を滑らせれば、悪趣味な黄色のマニキュアを施した指がこくりと新聞紙の上に転がった。切り口は見えないが、はみ出した筋組織と脂肪が血にまみれ、光の下でぬめつているのがはつきりと分かつた。乾いた紙数度の激しい手振れはするものの、レンズは五本の指全てが切り落とされるまで辛抱強くその場に留まっていた。

レンズが引くにつれ、医師がメスを捨てていたことが判明する。彼が代わりに取り出したのは小型のチーンソーだった。機体を股に挟み、ハンドルを何度も引っ張る。エンジンの回転は、局地的な照明から外れた部分に立つていても関わらずしっかりと捉えられ、巡る刃の輝きがダイヤモンドのようにちかちかと光った。

準備が整つと、男は再び患者に向き直つた。一度機械の重みでよ

ろけたのは『愛嬌だ。獲物を狙うジェイソンよろしくチエーンソーを高々と抱え上げる。ライトと同じ位置にまで持ち上げられた回転刃の速度は、取り返しのつかない速度までヒートアップしていた。

撮影者が走り、医師の正面に回る。マスクとキャップの隙間から見える瞳は、表情など一切窺えない。数秒仁王立ちの姿勢で動きを止めた後、唐突に腕が振り下ろされ、唸る刃が女の胴に迫った。

「オーケー、もういい」

男が手を振ったのにあわせ、レスはマウスをクリックした。チエーンソーはちょうど肉に食い込むか食い込まないかの決定的瞬間。ぶれすぎて何が何やらさっぱり分からぬ。

「どうかな」

「どうもこうも、最低だな」

「頼むよ、ラビー」

ラビーと呼ばれた男は答えず、撫で付けていた黒髪を指で梳いている。近寄りがたい程強面の彼の造形中、眼が覚めるような空色の瞳だけは、レスが彼と出会った時と同じく曇るということを知らなかつた。混じりけの無さで考えれば間違いなく無垢と言える眼差しは、外界の全てを弾き返す。自らが放つ狂気によつて。

最低限の礼儀こそ弁えているが、一回り以上年嵩の危険な目をした男へ使うには幾分親密すぎる口調と共に、レスは身を乗り出した。「もうちょっと見てくれたら分かると思つけど、ここから先が盛り上がるんだ」

「女が死んでるって分かつた時点で盛り下がつちまつたよ」

ウェイトレスが「コーヒーを継ぎ足しに来る。暇なのだろう。客は数人、絶対に隣り合わないよう席を取り、思い思いに午後の時間をやり過ごそうとしている。生産的行動に携わっているのは自分たち

だけだと、胸を張つてレスは答えることが出来た。広げたラップトップを覗き込むだけの簡単な作戦会議。ポットを抱えた年増女をラビーは手だけで追い返そうとするが、一旦止めてレスの顔をじりりと見遣る。好意に甘えてカップを差し出せば、無表情の女は乱暴だがきつちり9分田までまざいコーヒーを注いでくれた。

「分かった？」

大きな身体を丸めるようにして画面を覗き込むしおりしさも、長年の付き合いでは全く通用しない。ラビーは頷いて、半分近く残っている自らのマグを指で弾いた。

「どこから持つてきたか知らんが、そんな古い奴じゃないな」

「多分6時間は経つてない」

混沌とした静止像の中で、辛うじて分かる首の辺りを指でなぞる。「男に捨てられて薬を飲んだって。家賃半年分滞納してたから、身体で払つてもらつたつてこと」

「マニアは詳しいからな。浮腫みとかですぐ勘付く」

同じように画面からはみ出しかけた手を指し示す。明らかにライセンスを偽造している機器はモニターも安っぽく、ちょっと爪で押されただけで不快な色に滲んだ。

「あと、生きてる奴の指を落としたら、もつと派手に血が飛び散る。いつそのこと、死んでるのを前提に撮れば良かつたんだ。何なんだ、最初のところ」

じろりとカウンター席を田だけで示す。

「ポルノの自己紹介みたいだ」

明らかに聞こえているはずなのに、スリップ姿で下手くそな代役を務めていた女はこちらを見向きもしない。だらしなく肘を付きアイスクリームでも貪つてているのだろう。熱心に日焼け剤を用いているだけあり、仕事用のカットオフジーンズから伸びた脚はむらなくオリーブ色だつた。確かにボディ・ダブルとしては不向きだつた。哀れな家賃滞納者はもつと痩せっぽちだつたし、まるで蚕のよみこ色が白かつた。

「今時死体や殺しの場面なんか、コーチューブで幾らでも見られる。もつと何か、あつと驚くものがないとな……ありきたりすぎる」

「誰かさんはありきたりで興奮するんだろ」

回転椅子から突き出された尻から視線を剥がし、レスは吐き捨てた。窓の方に視線を逃がすと、曇ったガラスの向こう側で赤い魚が無気力に揺れていた。群青の空と白けた通りの間、檸檬色の日差しの中を、レッズナツパー・ダイニングの文字と共にたゆたつている。看板はその職務をまともに果たしていなかつた。手招いても誰も来ない。夜になつたところで、彼が輝くことはできない。心無い酔っ払いを始めとする人生を眞面目に生きていらない人間にネオンを叩き割られたせいで、輪郭すら今にも風化してしまひそうだつた。

「女が気に入らないなら」

強い風がブリキの板をもみくちゃにする。その光景から、レスはいつまで経つても目を離せないでいた。

「親父でも呼べってか」

拗ねた子供以外のなにものでもない口調に、ラビーはいつもの如く呆れて肩を竦めるしかなかつた。

「来ないだろ。一本の映画に1000万ドル貰つてゐる人間が。こんなスナッフ映画に」

「スナッフじゃない。誰も殺していないんだ」

ふうっとカフェイン臭い息を吐き出したレスも、自らの[冗談]にうんざりしていた。

「分かつたよ。最初の部分は全部切る。でもそうなると、再生時間が3分の2位になるぜ」

「かまやしないよ。余計なもんはないほうが売れる」

ラビーはもう、椅子の背に掛けていたスプリングコートを取り上げていた。

「どうせあんなところ、あつても早送りするんだから」

引き抜かれたUSBメモリーをポケットに落とし、伝票を掴むのはまさしくお茶を濁すため。文句を付けつつも、ラッシュ映像は今晩彼の弟に供されるのだろう。引きとめようとしたレスは、すんでのところで言葉を飲み込んだ。用事など何一つない。そう、レスはこれから、何一つ予定がなかつた。動画の編集はまた明日。すっかり慢心して、デジタルカメラを友人に返してしまつたのが運のつき。かといって自分用の物を買い揃えることだけは、プライドが許さなかつた。

「そういう、このチエーンソー振り回してる奴」

ふと思いついたのか、ベルのついたドアを潜るうとしたラビーが足を止めた。顔を跳ね上げたレスの眼をまじまじと見つめ、「コードのポケットを叩いてみせる。

「ドク？」

「ああ」

自分で分かつてている未練がましさを宥め、何気ない顔を作るために、「コーヒーを一口。ついさっきまで舌を火傷しそうな程だったのに、もうカッパの中身は味気なく冷えていた。

「死ぬほど嫌がつてたけど、あいつも結局がめついだろ。弟の病院とか。あの後、自分の膝切り落としそうになつてたくらいで

「そつか」

まるで自然な口ぶりで、大変だな、と呟く。

「膝は無事だつたのか？」

「ちょっと掠つた位。血は出てたけど。映つてたんじゃないかな」

「そのところは残しとけよ。目玉になるかも」

バナナサンデーを迎えるべく身を屈めた女の胸を覗き込んでから、ラビーはレスの胸を指差して見せた。

「完成したらまた連絡くれ」

ちりんと音が鳴つて、店の中に沈黙が戻つてくる。どうせタダなのだ。本当はもう一杯位コーヒーを飲んでいいのだが、今までの物騒な会話などなかつたことにされている空間にこのまま居

座るのが嫌で、結局レスはラップトップを鞄に戻した。早く出るのは得策ではないと分かっているにもかかわらず。何をしたら良いか、本当に分からなかつた。自らの太腿に切りつけた間抜けなマッシュ・サイエンティストのところにでも行つて時間を潰すくらいしか思い浮かばない。金銭に汚いのは事実だが、本当の彼はヘル・メンゲレとは似ても似つかない性格だ。飲み損ねたコーヒーくらいは出してくれるだろう。

立ち上がった気配を感じたのか、意地汚くスプーンを舐め回していたクリスタが声を上げた。振り向きもしない。

「お父さん、出てくれるんじゃない？」

一瞬で場が凍りつくような睨みを利かせてもどこ吹く風。クリームを味わう顔は、ささやかな憂さ晴らしだろう。アイスクリームはオーガズムのような恍惚を呼ぶが、その逆は滅多にないことを女は経験上良く心得ている。

「この前テレビで掛かつてた映画……『ハウリング・マッド』だけ？ あれですか、『』といサイコな役やつてたじやん。受けてくれるつて」

「知らねえよ

一緒に見ていたことを知りながら、それ以上はことを荒立てる気はないのか、黙つてまたスプーンでアイスを掬う。皿の中に垂れてしまいそうな髪を搔き上げ、わざと澄ました顔を作つて見せるのは明らかに機嫌が悪い証。図星をさせた余程腹に据えかねたらしい。もちろんレスが否定しなかつたことも。

『ハウリング・マッド』の女を吊るして殺す役どころか、世界を救う銀行員の役も、アメリカを横断する刑事の役も、彼は台詞をそらんじることが出来るほど繰り返し見ていた。幾つかの台詞はそらんじて言えるほど。小さい頃からテレビの前で賞賛し、映画館で憧憬を抱いた勇ましい姿。焦げ茶色の豊かな髪と同じ色をした凛々し

い瞳。がっしりと逞しい体躯。爽やかな声。

彼がレスの顔すら知らなくても、レスは彼のことによく知つていた。まるで身近に暮らしていたかのようだ。

「あ、それともあんたが出てもいいんじゃない。後姿だつたら絶対分かんないよ」

よっぽど手が飛びそうになつたが、ぐつと息を飲み込むことで耐えた。視界の隅で、壊れた魚の看板が躍る。畳み掛けるように続く言葉に押されるよう、揺れますますひどくなるばかり。今にも外れて飛んでいきそうだ。

「中途半端にしてないでさ。トラック運転手だけでも食べていけるのに」

「はっきり言えよ。ギャングの情婦の方がいいって？」

「かもね。でも無理よ。どうせなる勇気なんかないでしょ」

言い返すことも出来ず、そのまま乱暴にドアを押し開く。火照った耳の奥ではベルの音も聞こえない。

風は強かつた。魚が振り回されるのも仕方がない。だが成す術もなく風に煽られていく看板の姿は見ていて腹が立つし、先ほどから集中力を散々妨げてくれていた。いい加減、修理にでも出せばいい。だがレスがこの店へ出入りするようになつて以来、結局ネオンは割れたまま。毎回も特に目立つわけでもなく、新規の客一人を呼び込むことも出来ないでいる。こんな下町のダイナーに客が来るはずがない。それでも虚しく、どぶ臭い空氣の中を泳いでいる。

錆びた金属の擦れ合つ音が癪に障る。いつそのこと完膚なきまでに叩き割つてやろうとすら思つた。だがそんなことをして何になると言つのか。かつと頭に上つた血が、冷たい秋風に嘲笑されて一瞬にして熱を下げる。

こうなつたら是が非でも今日中に編集を終わらせてしまわねばならない。駆られた鬱屈に促されるよつ、レスは道を駆け出していた。

まずその生い立ちからして、レスは不幸を絵に描いたような青年だった。売春と教会が経営する老人ホームの掃除が8対2という割合で生計を立てていた彼の母親は、産婆に抱かれた一人息子を一瞥して一言。「どうして彼が結婚する前に生まれてこなかつたのかしら」。悪役めいた台詞を吐く女の常で彼女は馬鹿ではなく、皮肉と諦観を込めて赤ん坊の名前をレスリー・クレザン・ミッチエルと名づけた。一ダン・ミッチエルのなり損ない『レス・ザン・ミッチエル』。

あのダンカン・ミッチエル！ テレビドラマ「A·M·ミッドナイト」でロスのタフでイカした刑事トリクシー・ブラッドを演じたミッチエルが、ハリウッドからもニューヨークからも近いとは言えないティンゼルタウンでわざわざ子種を落としていくはずがない。そもそも言いきれないのが悲しいところで、生涯に一度だけ、彼はこの街にある施設へ慰問に訪れていた。そこで働いていたのがストロベリーブロンズでブルーの眼を持つ、比較的やつれてい一人の女。子供を宿したと知る前から彼女は、トリクシー・ブラッドと一夜を共にしたのだと言いふらしたし、夜に腕を組んで歩いている姿を目撃した同僚の清掃夫もいた。70を過ぎた彼の眼は極端に悪かつたため、誰も信じる者はいなかつたが。

それは彼女が何ヶ月か後にわざとらしくトイレへ駆け込んでも変わらなかつた。変わるわけもなかつた。仕事が仕事だし、彼女は俳優がやってきた1ヶ月後に、いかがわしい組合員の男と同棲を開始している。何よりも様々な慈善団体への寄付を怠らず、既にスター

レットとの過ちを認め、教会行きのカウントダウンを始めているような男の中の男、ダン・ミッチェルが、この際一人や二人の認知を拒むわけがないことを皆知っていた。

その点について彼女はこう釈明している。取引があつたのだ、と。ある日厳ついロシア人風のマネージャーがやってきて、彼女に養育費という名目の口止め料を払つたのだと。その時無知だった彼女は非常に損な　曰く、尊嚴を踏みにじるような少額の　契約を結び、一括で払われた数万ドルとこれ以上の金を求めてビバリーヒルズを練り歩いたりしないという誓約書のみが手元に残つた。その経験に基づいてえせ談合屋などと付き合い始めたらしいのだが、子供が産まれた途端、少なくともこの男を共犯者と呼ぶのは酷だと人々は認めざるを得なかつた。談合屋はブロンドと涼やかなグリーンの眼を持つ細身の男。息子は最初こそ柔らかな金髪を保つていたが、2歳の誕生日には見事な栗毛へ変身し、そのことを予言するかのように瞳は最初からくりくりとしたチョコレート色だったのだから。そう、あのトリック・ブラッドのように。

レスにとって更に不幸だったことは、彼が生まれてから成人するまでの間に、ダン・ミッチェルが穏やかだが目に見えるような衰退の道を辿つたことである。レスが学校に上がりすぐまでは、トリック・ブラッドもまだテレビの中で銃を乱射していたし、華やかなゴシップにも事欠かなかつた。生活保護の関係で叔父と呼んでいた義父にも、粗末な身なりと母の職業を馬鹿にする級友にも当たり構わず、「僕の父さんはトリックだ」と喚き散らした関係上、彼は結局自らの出自が特別でなくともそこに生まれた限り当然辿つていた道しか歩むことができなかつた。同じアパートに住む売春婦の子供た

ちとばかり遊び、常に自分を無視する両親の諂いを聞いて眠りにつく。プライドさえなければ、彼がもう少しともな人生を歩んでいたはずだったことは、周りの誰もが認めるところだった。手足が伸びるにつれ、レスの容貌は際立つてゐるといわないまでも整つていることが明らかになつていった。6フィート3インチもある引き締まった体つき、色の濃い栗毛。少し淋しげな眼差し。その顔立ちはもとより、少し猫背気味の立ち姿や長い肢体を持て余す様子が夢の父親そつくりと来ては、これに關してはテレビや映画を録画し真似を繰り返した賜物なので反則と言えばそうなのだが、頭の悪い女の子たちは簡単に引っかかつてしまつた。もう少しともならば、と分別のある　彼が本当に付き合いたいと願つていて　ローティーンの少女たちすら嘆いたものだ。プレッピ・スクールのブレザーを着てディトナに寄りかかっていたら、GQのカバーに載つていてもおかしくないのに。実態はただのワル。しかもそんな権利などありはしないのに、ショッちゅう侮辱を感じている。

そして劇的展開。レスが17歳という一番多感な年齢の頃、くだらないゴシップ誌の間を小さな小さな衝撃が駆け抜けた。トリック・ブランド、不倫後再婚。テレビシリーズが終わつた後も引き続き映画スターとして活躍し、プライベートでは子供を肩車してドジャースの試合に連れて行くようなミスター・ナイスガイがなぜ？　貪り読んだ雑誌で分かつたのは、相手がレスより二つ年上であること、ナイスガイは再び男らしく責任を取つて子供を認知し、メキシコで盛大な結婚式を挙げたということくらい。星の数ほどある醜聞の中にあっけなく埋もれてしまうような出来事も、彼を含めほんの数人だけは執念深く覚えていた。

「それでお前は、全てを俺のせいだって言いたいんだな？」

スラックス越しに包帯の縁をなぞりながら、ドクター・キルケアは黒い目を瞬かせた。ただでも瘦せ型だったのが不摂生な生活でげつそりとやつれ、童顔をようやく実年齢と見合つものに変えている。血色の悪い顔色がそれでも黄み掛かっているのは流れる血のせいだつた。父親の顔を知らないという点を含め、彼は医者と言つ枠組みを超えてレスの悩みにぴったりと寄り添う資格を有している。違うところと言えば、彼の母親は息子に夢を捨てるよう促し、自らの父親をジャッキー・チョンやサー・チバであると仮定することを許さなかつたくらいだ。

「何だけ

「思い出せ

汚いグラスの中身を煽り、レスは首を振る。ただでも苦いトニックウォーターにキーネの0・5グラム錠をスプーンで碎き、申し訳程度にジンを垂らした液体は、唇を真横にひん曲げとなるほど強烈な苦味を持つていた。飲みすぎると耳鳴りがするのは玉に瑕だが、それは恐らくホストの意思表示。さつさと帰れと言いたいのだろう。同じものを啜るキルケアの眼下にはつすらと隈が浮いていた。

診療所のドアを叩いた時、ちょうど帰りがけの患者とすれ違つていた。近辺では見かけない顔だった。少なくとも娼婦ではないらしい。学生だろうが「ールガールだろうが、ここを尋ねる女に共通する顔色の悪さと、鼻の奥を無理に拡張するようなヨードチンキの匂いを漂わせていては、違ひなどどうでも良くなつてくる。

診察室の主が洗うキーラン鉗子の輪になつた先端には、まだ先ほどの女の肉体と彼女から引き剥がされた生命の一部が残つていた。思い切り顔を顰めたら、同じような顔を返される。小学校へ入る前

どちらかが発明した遊びの一つは、再開されたのではない。今でも細々と継続しているというだけの話だった。

「そんなに傷つぐ」とか？　おまえのお袋はとんだ淫乱だ、とか

「違う」

「じゃあ……ビッチ？」

「おまえのお袋がだら」

呂律が怪しいのは疲労のせいか薬の副作用か。本来渡すはずのキーネが余ったということは、患者は冷静かつ迅速にここを訪れ、術式は滞りなく施されたということなのだろう。普段自己処方など行わないキルケアが憂鬱症の発作を宥めきれなくなるほど何の障害もなく。女性的な唇を白衣の袖で拭い、見つめる目は笑みを刻んでいるのに淀んでいた。

「ああ。『結局どっちに似たって、ろくでなしには変わりないじゃないか』って」

「覚えてるんだな、やつぱり」

しんねり呟いた積年の非難など、鎮静された意識には痛くも痒くもないらしい。湧き出る唾液を飲み込み、レスは今が好機とばかり言葉を吐き出していった。

「言い返すことを考へてるうちにお前は大学行つて軍隊だろ」

「そう、まだ奨学金も返してない」

デスクの上で山積みになつた紙の束へ手を伸ばした弾みに、チヨツカ一のボードが床に落ちる。固い音がいつもよりも鋭敏化され、頭の芯に直接響いた。

「もう一年半は滞納してる。いい加減督促が来るかも」

「とにかく俺は傷ついたんだ」

「純情」

ふつと似非笑い、キルケアは手にした封筒の縁を人差し指でなぞつた。

「俺が言いたかったのは、海には魚なんて山ほどのこと。魚も悪くない。無理に鮫になる必要なんてない」

「鮫つて魚だる」

「知らんよ」

「海軍の癖に」

染み渡った苦さに声が擦れはじめる。溜め息を吐き出す事すら叶
みなくなるほど。鬱々とした表情を隠しもしない様子に、いい加減
キルケアも何かに勘付いたらしい。右眉と口の端を同時に吊り上げ
る。

「珍しいな。こんなにしつこく絡んで来るなんて」

「買いかぶりや」

レスは唸つた。

「何もかも上手く行かないんだ。お前があんな」と言つて以来「
訂正するよ」

肩を竦める動作はあまりにもやつがなく、謝罪の意など当たり前
だか当たらない。

「ダン・ミッチェルは何事もなく復活した。お前がついてないとい
たら、それは血筋じやなくて育ちのせいだ」

「努力はした」

嘆きの言葉と裏腹に声音は泣きも怒りも表現しない。あれほど憎
んでいた義父の伝で長距離トランクを運転することになった口と同
じだった。希望など最初からありはしないなどとは、まるで思つて
もいらない顔でレスは怒る。

「何でかな。ここまで上手く行かないなんて」
目を擦つても歪みが取れない。

「おかしい。こんなに上手く行かないなんて」

「ところで、金の方はどうなつた」

招かれざる訪問客にも価値はある。一番聞きたかった疑問を口に
することができ、キルケアの気分は少しだけ上向き加減になつたら
しかつた。一箇所に留まつた瞳は正氣で、唇には柔らかいカーブを
刻んでいる。

「傷害手当くらいは出やつか?」

「まだ貰つてない」

頭を振り振りレスは答えた。やつてきたのは眩暈といつより眠氣で、強制的に引き出された鎮静が体温を末端から上げていく。

「編集をしてから。頭を全部切れつて」

「本番のみつてこと?」

「ああ……クリスタの」

グラスを掴む指が滑りそうになり、テーブルに戻す。

「現代人は、人が死ぬのなんか見飽きてるんだと」

「言えてる」

指の腹に残つた零が熱を孕んでいく。思い出せないと云ふことは、その必要がないこと。何かで目にした台詞が螢光色で頭の中を飛び回つている。

「なあ」

名前を呼べば、キルケアは頬杖の上でぼんやりと頷いた。ハイスクール位の頃、まだ不安を不安と認識していなかつた頃、不定形の鬱屈を同じく流れに乗つて消えていくマリファナの煙に混ぜ込んだことを思い出した。このままマスを搔いたら最高に良いのだと噂を信じ込み、レンタルビデオ屋で選んだ一マル「ビッチの穴『Bell John Malkovich』。ラリストままの自流は自由だが、ビデオを借りるのはいけない。タイトルと裏腹に全くヌケず、結局一人して一言も喋らずテレビを睨んでいるうちに酩酊は覚めた。

あの時感じた超常的非現実感を、レスは久しぶりに噛み締めていた。デスクの上でチェックカーのボードを弄ぶ手が人に接続されいると思えないような不器用さで動いていることが、余計に感覚を煽り立てる。違和感は空白に繋がつていた。違うと叫んでも、埋めるものは何一つ見つからない。

「別に……怒つてるわけじゃないんだ」

椅子からすり落ちはうになつた瞬間こそ流石に靄も晴れたものの、結局危機感を覚えた身体は本能の命ずるまま立ち上がつていた。左右へ揺れるような歩みで、先程まで女が寝ていたのであらう場所にたどり着く。数歩の距離はまるでないようにも、2万マイル近くあるようにも感じられた。背後から声を掛けられた気がしたが、鼓膜は自らが放つ以外の振動を一切拒絶していた。

明らかに柔らかさの足りない診察台に頬をぶつけ、膝はでこぼこしたりノリウムの感触に安堵する。変な形にねじれたままの唇で、レスは自分だけがはつきりと分かる不明瞭さで呻いた。

「ただ気掛かりで。あれちゃんと抜け、る……か……」

何言つてんんだ、と、膜で覆われたかのような声が聞こえた。その口調がまるで、子供の愚痴を聞く母親のようなのだ。ぞつとして、レスは逃げるように寝椅子型の台へ這い上がろうとした。だがもがく爪が引っ掻いたものが安っぽいビニールだと知り、いつものように諦める。祈りでも捧げるように突っ伏したまま、引きずり込まれていく意識の中で散々逡巡する。このままではまずい。癪癩を起されたらたまらない。こんなところで寝ちゃいけない。怒られる。逃げないと。しつかりしないと。相反しているように見えて結局裏表でしかない命令は、フィルムの切れた映写機から映し出される映像の如く、白抜きに溶け込んでいく。情けなかつた。怖かつた。だが結局、どうでもいいという感情に流されて、全て飲み込まれていく。

父さん、と口の中で呟いて目を閉じたときには、先など何も見えなかつた。あるのは暗闇だつたが、それを喜ぶべきかそうでないのか、レスは遂に考えることなく意識を手放した。

その見かけに違わず、フロリーはどうにもがさつな性格だった。あるときスマートサーモンのマリネを作っている最中、切れ味の悪い包丁に襲い掛かられ人差し指の皮は一刀両断。指を咥えて甘えた唸り声を上げれば、だらしなくソファに身を預けていたスリムは一瞬だがアメフトの中継から意識をそらした。

「いやんなる！」

第一関節から溢れる血が、唾液に混じって嘆きと共に口から零れそうになる。その様をじっと、あの新緑色の瞳で見つめられると、それだけでフロリーは一の腕の産毛がちりちりと焦げるのを感じた。だが官能も一瞬だけ。すぐさまテレビに向き直ったスリムは、夕飯を待ちきれず開けていたバドワイザーの缶を取り上げた。中の液体からすっかり気が抜けていると知り、ふんと一つ鼻を鳴らす。

「あの赤んぼ殺しに診てもらえよ」

すぐない言葉に返す嫌味も見つけられず、既に血の止まっている指をしゃぶりながらキッチンに戻るのがお決まりのパターン。自業自得だとは分かっているのだが、彼女はそれでもあからさまに拗ねた顔で唇を尖らせるのだった。

スリムと呼ばれる男にフロリーが出会ったのは数年前のこと。悪名高い『ナイジエル・ランチ』のちょうどライトが当たらぬ位置に陣取っていた彼へ、ブラジャーを投げつけたのがその始まり。特に狙っていたわけではない。ただ、少し悔しかったのは確かだつた。こんなにも豊満な肉体が眼の前でくねっているのに、見向きもせずバー・ボンを煽つていられるなんて。ホモか不感症か、それとも他のことに集中しているか。飛び込んできた黒い布切れを見下ろす目つきから、第三候補だとすぐに気がついた。途切れた集中力を繋ぎな

おしながら持ち上げられた顔を見たとき、フロリーは危うくポールに擦り付ける腰の動きを止めてしまいそうになつた。獲物を狙う獣で表現してしまつことができたならどれほど楽だつただろう。スリムはぎらつく目をじっと舞台に注ぎ、それからにやりと笑みを浮かべた。閃いた光の得体のなさ、その形に変化した理由がさっぱり読み取れない唇の歪み。自分を見て笑つているのではないと、瞬時に気が付いた。逃げたほうがいいのかかもしれないとも。それなのに彼女はその夜自らのベッドに彼を招き入れたし、気付けば部屋に来ることを許している。

確かに、ボーイフレンドとしてキープしておく分には悪い男ではない。品はないものの冗談は言えるし、世界で一番おいしいフレンチトーストを作ることができる。気分次第では職場で絡む酔っ払いを殴つてくれもした。退役後も頭がジャーヘッドなままの男に加減や良識なんて言葉は最初から求めていないので気にならない。そもそも彼に増して奪つたり傷つけたりすることしか知らない男など世の中に山といっているのだ。またこれは一番重要なことだが、フロリーは少々手荒く扱われた方が燃える性質であると、自らの性向を正確に把握していたのである。

今日も今日とて相手にパンティを履く暇すら与えず、スリムは自らが乱暴に叩いたドアから反響が返つてこないうちにドアを開く。何とか布を引き上げるところまでは成功したが違和感は拭えない。全てを無視して、フロリーは逞しい身体に飛び込んでいた。梵字のタトゥが刻まれた太い腕は、弾む肉体を簡単に受け止める。パワーに包まれた上半身が僅かに逸らされた瞬間、ぱりぱりと小さな音が二人の間に滑り込む。はつとして、足元に眼をやつた。ワーカブ

ーツが、玄関先に飾つてあつた松ぼっくりを踏み潰している。

「あーあ。もう」

「ああ？」

身体を離し、今日初めてまともに見た顔には、興奮の欠片も見当たらなかつた。ぽんと脛を蹴飛ばされて、ようやく障害物に気付いたらしい。持ち上げられた靴底の下からすばやく攫つた木の実を、フロリーは男の鼻先にぶら下げて見せた。白い絵の具が塗られたそれは見事にひしゃげ、かさが好き勝手な方向に広がつてゐる。

「何だそりや」

「もうすぐクリスマスでしょ。オーナメント」

「今何月だと思つてんだ。この前ハロウインだつて騒いでたばかりだろ」

「とつぐに終わつたわよ。もう世界はジングルベル」

ふんふんと鼻歌で奏でて見せれば、それを搔き消すように噴出された鼻息。女を小馬鹿にしてみせるとき、彼の丸い顔は猫のようくしゃつと真ん中に寄つて、不思議と愛嬌があつた。

「どうして女つてのはそつ、お祭り騒ぎが好きなんだか」「せつかく可愛くできたのに」

言つては見るものの、無念さは全くといつて良いほど感じない。部屋の外に向かつて投げつければ、早すぎた聖夜の余興は小便臭い階段の上を数段飛ばして跳ね、見えなくなつた。

「クリスマスツリー買つてよ」

「どんなの」

抱えていた袋を押し付け、部屋の主よりも先にソファへ腰を落とす。彼のアパートを訪れたことはないが、家主がケーブルテレビに加入していないことは、ここに来るたびテレビのチャンネルを回しだがることからすぐに察せた。キッチンに引っ込み、フロリーは熱狂的な解説者にも負けない声を張り上げた。

「白いプラスチックの奴で、紫のライトがついてるの」

「ホモくせえな」

「見たことないからよ」

袋の中から出てきたシリアルは先日買つてくれと頼んだもの。真新しいオートブランの香ばしい匂いを嗅いで見たくなつたが、我慢して封を切らないまま棚に押し込む。

「クリスタが、つて友だちなんだけど。去年彼氏に買つてもらつたの。すごくお洒落なんだから」

「へえ」

クラッカーとクアーズの缶を持つて、こうと冷蔵庫のドアを閉めたところで気付き、慌ててバドワイザーを取り替える。幸いスリムの意識は駆け出したクォーターバックに向いていた。

「買つてくれる？」

「ああ」

生返事だったが、覚えてさえいれば彼が買つて来てくれるることをフロリーは知つていた。一体何の仕事をしているかは定かでなかつたが、ともかくスリムは最低限の金を持つていて。少なくとも女から生活費を巻るような真似をしてかさない程度には。これは友好な関係を築くうえで非常に重要なことだった。殴られたり怒鳴られたりは我慢できても、金を取られては生活ができない。職場から前借りができなくなつた途端捨てられたのならまだ良いほうで、ひどいときは部屋の前で待ち伏せされ、消費者金融へ引っ立てていかれたことも幾度かある。財産に手をつけないということは、自由を保障するということだ。スリムは彼女を縛ろうとしなかつた。他の男の前で乳房を晒そですが、訳の分からないものを欲しがろうが、馬鹿にすれば否定はしない。今までの男に比べれば、神か仏かとは言わな
いまでも、非常に良い待遇であることは間違ひなかつた。

彼の隣に腰掛け、持ち込んだクラッカーを齧る。耳元で響く、ブルタブを押しのけたガスの音が心地よい。はつきり言ってアメフトになど興味はなかつたし、スリムは説明の一つもしてくれなかつた

が、この時間をフロリーはとても大切にしていた。セックスは樂しい。だがこうして何をするでもなく二人でいるときに感じるこそ、ばゆさは、ある意味オーガズムを凌駕していた。自分の身体が彼一人だけのものになつたような気がする。

引き締まつた腹筋へ服越しに触れていたら、ふと指先に布ではない柔らかさが引っかかる。ごわつくそれをつつくと、スリムはソファの背凭れに引っ掛けっていた肘でフロリーの頭を軽く小突いた。

「いてえよ」

「何これ」

顔に掛かつたブルネットを搔きあげ、フロリーはもう一度違和感のあつた場所を撫でた。

「ねえ」

「大したことない」

頭頂部へもう一発お見舞いされる前に、手はパークーの裾を捲り上げていた。オリーブ色の肌に不釣合いな真っ白いガーゼ。中心辺りにぽつりと針の先ほどの血が滲んでいる。脇腹に走つた縫合痕を含め、彼の身体に走る無数の傷は見慣れていたし、未だ増え続けていることも知つてゐる。だがここまであからさまに血の匂いをさせているものは初めてで、思わずフロリーは息を詰めた。

「これ」

「トチつただけだつて」

特に興味を持つこともなく、何事もなかつたかのような顔でテレビに戻る。

「おまえには関係ねえよ」

そのまま彼女黙り込んでしまつたから、これで話は終わつたと思ったのだろう。だからもう一度にじるよう押し付けられた爪が、ざらざらしたガーゼ越しに縫目のおうとつを辿つたとき、予期せぬ痛

みに呻いたのだ。喉が震えた拍子に吹き上がったアルコールは、鼻腔にまで迫つたらしかつた。

「ぶつ殺すぞ！」

むせ返る動きに合わせて痙攣する腹筋の上に指先を這わせたまま、フロリーは煮えくり返る怒りに身を硬直させていた。

「ひどい」

レイプ魔のような視線に晒されても、ミルクチョコレートの色をした瞳は一切怯まなかつた。

「あいつのところに行つたんでしょ」

「何だよ？」

まだ籠つた咳を続けながらも、とりあえず汚れた口元だけは乱暴に手の甲で拭う。

「つたく」

「この怪我。治療してもらひにあいつのところへ行こ」

早口でそれだけ吐き出した脣は、整つた前歯に噛み締められて徐々に赤黒く変わる。とりあえず腹から相手の掌を払い落とすことに成功したスリムは、しかめた眉の下から放つ眼光を少しだけ緩めた。

「ああ」

怒りの温度は変わらないが、紛れ込んだ不純物のお陰で勢いは少しだけ下火になつたらしい。その機に乗じて、フロリーはまた声を張り上げた。自分でも、煮えたぎる衝動の原因がさっぱり分からな。論理的思考を放棄した脳の末端で爆ぜた火花が、視神経を伝つて眼球全体に広がる。

「仲悪いんでしょ、どうしてそんな」

「そりやあ、あいつは医者だからな」

見下ろす瞳に膜が張つたのを見た瞬間、スリムの声はあつという間にその熱量を失つた。

「いくら罰当たりでも

「普通に」

鼻の奥がかつと燃え上がり、ついで温り氣を帯び始める。幸い鼻

水が垂れるよりも早く涙が溢れ出し、顔中をとめどなく濡らし始めたが。

「普通に！ 市民病院へ行けばいいのに！」

「一番近かつたんだよ。それに」

汗すら引いた缶の底がローテーブルにぶつかる。じん、と硬い音は、二人の間に築き上げたトーチカに響いて、テレビの中の歓声から独立した。

「普通の医者に見せたら面倒だ」

白けきつた口調が火照った耳朵に触れた途端、フロワーの唇は戦慄きを忘れた、

「ばか！ このばか、ばか！」

飛び出す悪態の中で、自らが認識できたのはこれくらいだった。自分でも何を言っているか理解できないでいる。喉声と息遣いと呻きと金切り声と鼻を啜る音が「こちや混ぜになり、目の前が真っ赤に染まつた。霞む視界の中冷静と苛立ちの間でじっと身を潜める横顔だけをしつかり見ようと努力はしてみる。だが眉間に寄つた皺以外は、まるで普段と変わらないのだ。それが許せない、どうしても。今まで沸騰しているだけだった激情が吹き零れ、身体の隅々にまで行き渡る。だから固まつてしまつたかのような指を尻の下に突つ込み、潰れていたクッシュョンを掴んだ瞬間を、彼女ははつきり認識できていない。体重を掛けすぎて硬くなつた綿をジャーへッドに叩き付けた瞬間ばかりが、やたらとスロー掛かっていたのだけを覚えている。

「何話したのよ、話した？ どうせ」

一発殴れば後はもう手当たり次第で、無茶苦茶に振り回す腕が風を切り、その間にあーあー、という間延びした感嘆詞が挟み込まれる。勿論発信源は彼女ではない。いてえだのファックだの喚きながらもとりあえず数回は殴られてやつてから、スリムは慣れた動作で暴れまわる手首を掴んだ。ひゅううと息を呑んだフロリーが目を閉じるよりも早く、分厚い掌がきつく頬を張る。腕を捻り上げながら

もう一発。

「人様のやることに一々口出しするたあ大した身分になつたもんだな、ええ？」

更にもう一発張り飛ばしてから次が来るまでの間に、フロリーはほんのちよつぴりだが瞼を開いた。ぼやける視界の中で、にやにやと笑みを乗せたスリムの唇だけが、くつきりと浮かび上がつて見えた気がした。

「俺は俺のやりたいようにするんだ。分かつたか？」

乾いた音が一発も続けばもう目を閉じるしかない。泣き声を上げたらそれを叱るようにまた折檻。

「ほら、分かつたか！」

「分かつたわよ分かつた！」

喚き散らせば腫れ上がつた左の頬が突つ張つた。突放されるままソファに身を投げ出し、フロリーは残つていたクッシュョンに歯を立てた。母親から送つてもらつたパツチワークのカバーにじわじわ唾液と唸りが染み入る。掴まれていた手首に滲んだ汗は自らのものか、それとも男の手汗か。どちらにしろ腹立たしいのには変わりないので、目元を擦つて無理やり涙と同化させた。

発作的な啜り泣きは鼓膜の中で跳ね回つているものの、溜息の一定程度なら聞き取る余裕があつた。余韻も何もなくスプリングが軋み、熱が遠ざかっていくのを剥き出しの太腿で知つた。

「喚け喚け、ずうつと泣いてろ、くそつたれ」

ワークブーツの厳つい足音が遠ざかっていく。

「次来た時もそれ位しおらしくしてたら、せいぜい可愛がつてやるよ」

ドアが乱暴に閉まつても、フロリーは身を丸めるようにしてクッシュョンを噛み続けていた。悔しい。悲しい。妬ましい。原始的な感情は一度火がつけば燃え上るのは早いが、消えるのも早い。どちら

らかのチームが点数を入れたらしく、テレビの中で観客が熱狂し、コメンテーターの口調も早まる。せめて消していいて欲しかったと考えることのみが恨みで、後はもう、燃え尽きるのを待つだけ。涙が止まるのを待つだけ。

一頻り泣いた後、フロリーは鼻水と涙にまみれたクッシュョンからのろのろと顔を上げた。電話。足の裏が床に張り付きながら離れる。鼻を啜りながらも何とか寝室にたどり着き、受話器を取り上げることができた。覚えた番号を感覚の鈍い指で押し、ホール音がなっている間にベッドの上へ身を投げ出す。今日はもう、このまま寝てしまいたい。頭はそう思つているのに、一旦その気になつた身体は温もりを欲しがつた。

低くぼそぼとした声が、熱を持つ耳たぶを優しく打つ。それだけでもう、心が静まる。気持ちがリセットされ、尖っていた角が丸くなる。ハーハー、と投げかけた時にはもう、その小さな唇に笑みを浮かべていた。

「ねえ、今暇してんの？ もしそうなら、うん」

普段から少し甲高いのだ。これくらいで丁度いい。そう納得しながら、電話の向こうにいるキルケアへ掠れた声で囁きかけた。

「一緒にシリアルでも食べない？」

その見かけと裏腹に、フロリーは意外と用心深い性格だった。あるとき勤め先のステージで腰を突き出し見事なヴァンプを決めた直後、ねつとりした視線を一糸纏わぬ身体に注がれて全身鳥肌の嵐。男の欲情に慣れた彼女ですらも苛立つ陰湿さ、コートを脱ぎながら甲高く愚痴を零せば、ぐつたりとソファに身を投げ出していたキルケアは一瞬だが三面記事から意識を逸らした。

「いやんなる！」

忘れようとしていた怖気が、怒りに混じって嘆きと共に口から零れそうになる。その様を泰然と、あの漆黒の瞳で見つめられると、それだけでフロリーは胸の奥がきゅうっと締め付けられるのを感じた。

だが官能も一瞬だけ。すぐさま新聞を広げなおしたキルケアは、鬱屈を堪えきれずに開けていたクアーズの缶を取り上げた。中の液体からすっかり気が抜けていると知り、ふうっと一つ溜息を漏らす。「あのジャー・ヘッドに締め上げてもらえば」

すぐない言葉に返す嫌味も見つけられず、蘇った二の腕の粟立ちを摩りながらコートをクローゼットへ戻しに行くのがお決まりのパターン。自業自得だとは分かっているのだが、彼女はそれでもあからさまに拗ねた顔で唇を尖らせるのだった。

ドクター・キルケアと呼ばれる男にフロリーが出会ったのは数年前のこと。小汚い診療所で医療行為に勤しむ彼の元へ、生理が止まつたという理由で押しかけたのがその始まり。肩書きは外科医だった。だが非常に融通の利くことで知られている。今思えば市販薬でも買って自己分析すればよかつたのだが、彼は無知を馬鹿にするところなく、動搖を黙つて受け止めてくれた。結果的に診断結果がシロ

だつたと判明しても、それは変わらない。不規則な生活故のホルモンバランスの乱れが原因であると解説し、ビタミン剤を処方すると約束した彼の顔を見たとき、フロリーは思わず不安に丸椅子の上で身じろぎしてしまったほどだった。無関心で表現してしまうことができるたならどれほど楽だつただろう。キルケアは乾き過ぎて痛みを感じるほどの視線をぼんやりと患者に注ぎ、それからふわりと微笑んだ。空洞と見まがいそうな闇の不気味さ、まるで自分が道端に捨てられた空き缶にでもなつたかのように感じる口角の湾曲。彼女のために笑っているのではないと、瞬時に気付いた。逃げたほうがいいのかも知れないとも。それなのに彼女はその夜自らのベッドに彼を招き入れたし、気付けば部屋に来ることを許している。

確かに、ボーイフレンドとしてキープしておく分には悪い男ではない。辛いところに手の届くような相槌を打つてくれるし、子守唄を歌わせたら天下一品。風邪気味と見ればアスピリン代を含めただで診察してくれた。軍医のキャリアを捨てこんな街で診療所を構えている男に素直さや良識なんて言葉は最初から求めていないので気にならない。そもそも彼に増して偏屈だつたり自分の意見を押し通すばかりの男など世の中に山といえるのだ。またこれは一番重要なことだが、フロリーは多少の軽蔑を身に浴び羞恥を感じた方が燃える性質であると、自らの性向を正確に把握していたのである。

今日も今日とて相手のときめきを一切考慮に入れず、キルケアは自らのノックに気が済めば後は黙つてその場に佇んでいる。このまま待たせ不機嫌の種が芽吹いても困るので、体裁だけは巨大な尻をパンティに押し込むが違和感は拭えない。全てを無視して、ドアを叩きつけたフロリーはほつそりとした身体に飛び込んでいた。しなやかな腕は、弾む肉体をよろけながらも受け止める。ジャケットに

包まれた上半身が逸らされた瞬間、ぱりぱりと小さな音が一人の間に滑り込む。はつとして、足元に眼をやつた。コンビの靴が、玄関先に飾つてあつた松ぼっくりを踏み潰している。

「あーあ。もう」

「なに？」

身体を離し、今日初めてまともに見た顔には、興奮の欠片も見当たらなかつた。ぽんと脛を蹴飛ばされて、ようやく自らの失策に気付いたらしい。持ち上げられた靴底の下からすばやく攫つた木の実を、フロリーは男の鼻先にぶら下げて見せた。白い絵の具が塗られたそれは見事にひしゃげ、かさが好き勝手な方向に広がつてゐる。「ごめん。気をつけようと思つてたんだけど」

「ほんとひどいわ、オーナメント」

「もうそんな季節か。つい最近までハロウインだつて騒いでたのに」「とつくに終わつたわよ。もう世界はジングルベル」

ふんふんと鼻歌で奏でて見せれば、それを搔き消すように転がされた苦笑い。女を優しく見下してみせるとき、彼の細面は子犬のように全てが垂れ、なぜか庇護欲を搔き立てた。

「そうやって一年中イベントで浮かれるんだからな」

「せつかく可愛くできたのに」

言つては見るものの、無念さは全くといつて良いほど感じない。部屋の外に向かつて投げつければ、早すぎた聖夜の余興は小便臭い階段の上を数段飛ばしで跳ね、見えなくなつた。

「クリスマスツリー買つてよ」

「どんな奴？」

抱えていた袋を手渡し、なおそのまま待つていてくれるので、手早くリビングに追い立てる。彼の自宅を訪れたことはないが、「ティンゼル・カウンセル」なんてイエロー・ペーパーをマガジンラックに常備していないことは、ここに来るたびローテーブルから雑誌を取り上げることで察せた。キッチンに引っ込み、フロリーは扇情的なニュースにも負けない声を張り上げた。

「白いプラスチックの奴で、紫のライトがついてるの」「ちょっとどうかと思うけど、その趣味」

「見たことないからよ」

袋の中から出てきたシリアルは先日買つてくれと頼んだもの。真新しい乾燥苺の甘酸っぱい匂いを嗅いで見たくなつたが、我慢して封を切らないまま棚に押し込む。

「クリスタがね、去年レスに買つてもらつたの。すげくお洒落なんだから」

「そなんだ」

クラッカーとバドワイザーの缶を持つていろいろと冷蔵庫のドアを閉めたところで気付き、慌ててクアーズと取り替える。幸いキルケアの意識は州内にあるペットフード会社の醜聞に向いていた。

「買つてくれる?」

「いいよ」

医者らしき律儀な口調は、ひとまずフロリーを満足させた。彼がその時まで覚えているかどうかは別問題だったが。弟の入院費捻出に頭を悩ませていろとはいえ、ともかくキルケアは最低限の金を持っている。少なくとも女から生活費を巻るような真似をしてかさない程度には。これは友好な関係を築くうえで非常に重要なことだった。殴られたり怒鳴られたりは我慢できても、金を取られては生活ができない。職場から前借ができるなくなつた途端捨てられたのならまだ良いほうで、ひどいときは部屋の前で待ち伏せされ、消費者金融へ引っ立てていかれたことも幾度かある。財産に手をつけないとということは、自由を保障するということだ。キルケアは彼女を縛ろうとしたが、哀れもうとも否定はしない。今までの男に比べれば、神か仏かとは言わないまでも、非常に良い待遇であることは間違ひなかつた。

彼の隣に腰掛け、持ち込んだクラッカーを齧る。耳元で響く、ブルタブを押しのけたガスの音が心地よい。はつきり言つて広げられた記事には飽きるほど目を通していたし、キルケアはそれを種にして会話を広げる気など全くないようだったが、この時間をフロリーはとても大切にしていた。セックスは楽しい。だがこうして何をするでもなく一人でいるときに感じるこそばゆさは、ある意味オーガズムを凌駕していた。自分の身体が彼一人だけのものになったような気がする。

体格の割にはがつしりとした肩に頭を預けていたら、ふと極端な消毒薬の匂いが鼻腔を撲る。首筋に鼻先を擦り付けると、キルケアは喉を震わせながら彼女の秀でた額を押し退けた。

「くすぐつたい」

「何これ」

顔に掛かったブルネットを搔きあげ、フロリーはもう一度深く息を吸いこんだ。

「何か手術でもしたの？」

「別に？」

もう一度、今度は額を指で弾かれたりしない前にもつと距離を詰め、フロリーの鈍い頭は何とか回転を始めていた。彼が通常の医療行為だけではなく、グレーゾーンすれすれの「善行」に手を出しているのは承前の事実。それらで得られる収入を加えたところで、高い医療費や弁護士の費用を払えるのかはいささか謎だったが。いろいろしてるんじゃない、と曰くありげに睫毛を瞬かせていたクリステの笑みを思い出す。

「これ」

「手術つて言うか、来る前に患部の抜糸をしたくらいだけど

諦めたのか好きにさせ、そのまま雑誌に目を落とす。

「仕事は上手く行ったのに、逃げるとき門柱を乗り越えようとして

脇腹抉つたんだってさ」

そのまま彼女黙り込んでしまったから、これで話は終わったと思ったのだろう。だから遠慮の欠片もなく立てられた歯が、長い首筋に食い込んだとき、予期せぬ痛みに呻いたのだ。喉が震えた拍子に吹き上がつたアルコールは、鼻腔にまで迫つたらしかつた。

「何なんだよ一体！」

むせ返る動きに合わせて痙攣する喉仏をくつ付けた頬で感じながら、フロリーは煮えくり返る怒りに身を硬直させていた。

「ひどい」

アラスカもかくやと言つた視線に晒されても、ミルクチョコレートの色をした瞳は一切怯まなかつた。

「あいつを診察したんでしょう」

「だから何

まだ籠つた咳を続けながらも、とりあえず滲んだ尿を指先で誤魔化す。

「ふざけるのにも程度つてものが」

「その怪我。抜糸つて、あいつの脇腹を」

早口でそれだけ吐き出した唇は、整つた前歯に噛み締められて徐々に赤黒く変わる。とりあえず相手から距離をとることに成功したキルケアは、ひそめた眉の下から放つ眼光を少しだけ緩めた。

「ああ」

軽蔑の温度は変わらないが、紛れ込んだ不純物のお陰で少しだけ切先が鈍る。

その機に乗じて、フロリーはまた声を張り上げた。自分でも、煮えたぎる衝動の原因がさっぱり分からぬ。論理的思考を放棄した脳の末端で爆ぜた火花が、視神経を伝つて眼球全体に広がる。

「仲悪いんでしょ、どうしてそんな」

「だつて患者として来たんだ」

見下ろす瞳に膜が張つたのを見た瞬間、キルケアの声へあつという間に諦観が紛れ込んだ。

「頭が空っぽでも

「大したこと」

鼻の奥がかつと燃え上がり、ついで湿り気を帯び始める。幸い鼻水が垂れるよりも早く涙が溢れ出し、顔中をとめどなく濡らし始めたが。

「大した事ない怪我なのに！ 市民病院へ！」

「患者は患者だよ。それに」

汗すら引いた缶の底がローテーブルにぶつかる。こん、と硬い音は、二人の間にぶら下がった面会謝絶の看板にぶつかって、膝の上の「ゴシップから色を奪つた。

「金持つてるしね」

うんざりした口調が火照った耳朶に触れた途端、フロリーの唇は戦慄きを忘れた、

「ばか！ このばか、ばか！」

飛び出す悪態の中で、自らが認識できたのはこれくらいだった。自分でも何を言っているか理解できないでいる。喉声と息遣いと呻きと金切り声と鼻を啜る音がごちゃ混ぜになり、目の前が真っ赤に染まつた。霞む視界の中冷静と苛立ちの間でじつと身を潜める横顔だけをしつかり見ようと努力はしてみる。だが眉間に寄つた皺以外は、まるで普段と変わらないのだ。それが許せない、どうしても。

今まで沸騰しているだけだつた激情が吹き零れ、身体の隅々にまで行き渡る。だから固まってしまったかのような指を尻の下に突つ込み、潰れていたクッションを掴んだ瞬間を、彼女ははつきり認識できていない。体重を掛けすぎて硬くなつた綿を撫で付けられた髪に叩き付けた瞬間ばかりが、やたらとスロー掛かっていたのだけを覚えている。

「何話したのよ、話した？ どうせ」

一発殴れば後はもう手当たり次第で、無茶苦茶に振り回す腕が風を切り、その間に小さいながらもはつきりと聞こえる舌打ちが挟み込まれる。勿論発信源は彼女ではない。無言で腕を掲げ攻撃をやり

過ごしてから、キルケアは深々と息を吐き出した。再び振り上げられたクッショーンの合間に縫い、黒い目が腕の下から覗く。

「黙れよ」

喧騒の空白にそう一言放つたきり、再び口を噤む。フロリーは、自らの腕が瞬時に凍り付いてしまったのを感じた。淡々とした口調で容易く身体を縛り付けると、鮫のように感情の見えない瞳は言葉を一飲みにしてしまった。もつと喚けばいい。部屋は沈黙に包まれている。もつと暴れればいい。肉体の動きを阻むものは指一本ない。そう考える思考すら黒い深渊に吸い込まれる。

キルケアは穏やかに眇めた瞳で彼女を見下ろすと、黙目押しのよう口を開いた。

「泣くな。分かつたな？」

それは封印であり、同時に呪縛を説く鍵でもあった。

「分かつたわよ分かつた！」

固まっていた唇はわなわなと震え、瞼が再び熱を持つ。溢れ出る涙を隠すよう身を投げ出し、フロリーは残っていたクッショーンに歯を立てた。母親から送つてもらったパツチワーケのカバーにじわじわ唾液と唸りが染み入る。後頭部に突き刺さる視線の意味は一体何か。何にせよ辛くて、嫌々をするように顔を伏せたまま、左右に強く振つた。

発作的な啜り泣きが鼓膜の中で跳ね回つていなくとも、隣の肉体が立てる音は何一つ聞こえなかつただろう。余韻も何もなくスプリングが軋み、熱が遠ざかっていくのを剥き出しの太腿で知つた。

「そうやって泣けば何か変わると思つてるのか？」

「コンビの固い足音が遠ざかっていく。

「結構だな。そうなるようせいぜい祈つてるよ」

ドアが静かに閉まつても、フロリーは身を丸めるようにしてクッシュンを噛み続けていた。悔しい。悲しい。妬ましい。原始的な感

情は一度火がつけば燃え上るのは早いが、消えるのも早い。身を捩った際に、取り残された雑誌が涼しい音を立てて床に落ちる。せめてラックに戻していつて欲しかった考へることのみが恨みで、後はもう、燃え尽きるのを待つだけ。涙が止まるのを待つだけ。

一頻り泣いた後、フロリーは鼻水と涙にまみれたクッシュョンからのろのろと顔を上げた。電話。足の裏が床に張り付きながら離れる。鼻を啜りながらも何とか寝室にたどり着き、受話器を取り上げることができた。覚えた番号を感覚の鈍い指で押し、ホール音がなっている間にベッドの上へ身を投げ出す。今日はもう、このまま寝てしまいたい。頭はそう思つているのに、一旦その気になつた身体は温もりを欲しがつた。

面倒くささと不遜さの絶妙に入り交じつた声が、熱を持った耳たぶを優しく打つ。それだけでもう、心が静まる。気持ちがリセットされ、尖っていた角が丸くなる。ハーハー、と投げかけた時にもう、その小さな唇に笑みを浮かべていた。

「ねえ、今暇してんの？ もしそうなら、うん」

普段から少し甲高いのだ。これくらいで丁度いい。そう納得しながら、電話の向こうにいるスリムへ掠れた声で囁きかけた。

「一緒にシリアルでも食べない？」

時計を見るとまだ9時前。意識には留まつていなが、恐らく何か外の物音でフロリーは目を覚ました。もともと眠りは浅い性質ではあつたものの今日はまた特別。店が閉まつた後もうつかり騒ぎ過ぎた。ヤニ臭さも安物の香水の匂いもまだ消えない店の中で繰り広げられる、ささやかな狂乱。バー・テンダーの青年は磨く前のグラスにどんどんと安物のシャンパンを注ぎ、掃除夫の老人に振舞う。金勘定が趣味な名ばかりの取締役は、甲高い笑い声を上げるウエイトレスに色目を使う。極めつけは支配人パパ・ナイジェル 全ての雌犬の父親、パパ・ナイジェル！ の登場。明け方も近付いているというのにジョークの冴えは健在で、優しげな目つきを一切崩すことのないままブツ・シユミルズ片手に肩を竦める。

「若いうちに楽しむのは良い事だ。私くらいの年になると、頭とあれへ流れる血液の配分に注意を払わないといけなくなるからな」自宅にたどり着いたのは5時前で、その後化粧を落として服を脱いだだけで氣絶するようになベッドへ倒れこんだ。そうでなくともこのところ不運ばかり続いているから、この喜びを引き伸ばしたまま出勤まで寝こけるというのが昨日立てたスケジュール。なのにすっかりご破算、シーツの中で伸びをして、欠伸と共に零れる自らの間抜けな欠伸を聞いたら、頭の鈍痛は消えないものの瞼ばかりはすっかり開いてしまつた。アルコールは睡眠を阻害するという雑誌の記事はガセでなかつたらしい。まだ下着姿のままベッドから抜け出しても、耐えられないほどではない事実が運勢を悪い方向へ後押しする。まだ温もりを残している足裏をひんやりとしたフローリングへおろし、フロリーは肉付きの良い肩を落としたまましばらく座り込んでいた。起きたら何をするべきか。本当は知っている。溜まった洗濯物、髪の毛だけの床に掃除機をかける。特に不足しているものはないが、買い物に行くのも良いかも知れない。

でも本当のことを言えば、彼女は何一つしたいと思つていなかつた。酔いのせいではない身体のだるさが、30とほんの少し活動してきた肉体を蝕んでいる。もう一度掛け布団を捲り上げようかとも思つたが、意識の片隅と足が拒絶して身を引き起こす。とりあえず先ほどの印象は訂正。やはり少し肌寒い。音楽か、それが無理ならせめて暖房の稼動音でも部屋にあればいいのだけれど。ほんやりと考えながら、鏡台の椅子に引っ掛けたTシャツに頭を突っ込む。緑色で州立大学のロゴが入ったそれは、昔の彼氏の部屋から持つて来た代物だった。このゴシック体を見るたび、いい加減鋏で切つてウエスにでもしようかと思うのだが、そこそこ丈夫な布地はなかなかよれてくれないでいる。今のように、結局はどうでも良くなつてしまつ。

燃費の悪い身体が栄養を欲していたが、かといつてもたれ気味の胃は固形物など受け付けない。一度腰を下ろしたら朝食を食べ損ねることは明白だつたので、ダイニングテーブルに片手を着いてしばらく思案する。勿論、窓際に置いたラジオのスイッチを抜かりなく入れてあつた。陽気な男の声で、スペイン語をがなりたてている。集中力は乱れるが、実際のところそれほど氣を揉むことではない。とりあえず舌と上顎がくつ付きそuddtたので牛乳を。冷蔵庫から引きずり出したボトルに唇をつけ一口一一口。獣臭い液体が通り過ぎるたびに喉が縮んでは広がり、頭が冷える。思考回路はとりとめもないままだが、気分の面では少し、ほんの少し。

思い出したのは買つてあつたシリアル。胃を刺激せず栄養価は高い。どうして存在を忘れていたのだろうと不思議に思うほど、今の状況に打つてつけ。食器棚の下に屈みこんで中を漁る。もう少し寒ければキャンベルスープでも良かつたのだが、鍋に入れて火をかけるそ

の手間と時間が億劫だ。チーズマカロニも同じ理由で却下。最近わりと真面目に食事を作っているのでレトルト食品は豊富に蓄えられていた。これなら買出しにいく必要もないだろう。

まず登場したのは黄色い熊の絵が描かれた可愛らしい箱。干からびて赤黒く変色した苺が入っている。これをテーブルに投げ出しておく。次いで隣に並んでいた茶色の箱にも手を伸ばした。安物のオートブランである。ついさっき行つたのと同じ手の動きで天板の上を滑らせる。先客にぶつかつた箱はお利口なハーフガロンのプラスチックボトルに阻まれ、床へと落下することはなかつた。

同じ棚の三段上からボウルを取り出し、ついでにスプーンも。ここまで来てやつと座ることができる。事実フロリーは、大きすぎる尻を落として食器をテーブルに着地させた。

だが材料が揃つたにもかかわらず、彼女はしばらくの間、ぼんやりとそれらを見つめるだけだった。目の前にあるものが何に使うのかも知らないといった顔で。身体はだるい。だが眠気は取れたと彼女は思い込んでいた。時計は9時を12分過ぎている。ラジオから垂れ流される言葉は相変わらず意味が分からない。シンクの前に横たわる窓はそこそこ大きいものの、隣の雑居ビルと隣接しているお陰で碌に光も入らない。辛うじて煤けたコンクリートを潜り抜けてくる朝日は細く白く、テーブルの上を数条に渡つて舐めるだけで、その下に隠された裸足のつま先を暖めてはくれなかつた。反対側の踵で踏みつけて暖を取つてみるものの、破れも目立つ合成樹脂は末端冷え性から容赦なくぬくもりを榨取していった。せめてジーンズを履けばよかつたのに。剥き出しの太腿を覆うよう手を被せながら、フロリーは考えていた。昼夜逆転一步手前の生活は、睡眠時間の短さで辛うじて正常範囲を保つてている。努力しても肉体は不満を感じているようで、また太つたらしい。身じろぎにあわせて揺れる太腿の贅肉を感じるのが、腹立たしかつた。“シリアルはお子様の成長に

必要な栄養素をバランスよく配合した最適な朝食です”。ここでもうやく、意識で思うほどには満たされていない腹具合を思い出す。

オートプランを取り上げる。箱の上部を引っ搔くようにしてこじ開ける。三流ブランドの癖に、紙の内側には更に銀色のアルミ袋が見える。引きずり出して、箱の方は小さく引き裂いた。部屋の片隅に鎮座したダストボックスへ投げ込もうとしたが、諦めてテーブルに積み上げる。後でゴミ袋を交換しなければならない。収集日は二日後だが、蓋が開きかかっているところを見ると恐らく容量の9・5分目まで内容物が迫っている。

お待ちかね、袋の口を開くと、香ばしい麦の香りが鼻を撫った。砂糖が少ないんじゃないかと思つたが、許容できる範囲。これをボウルの底から三分の一まで注ぐ。

続いて引き寄せた熊の箱を開く。この箱は小さい頃から御馴染み。だが数年前キャラクターのデザインが変わった。前はもつと可愛かつた。目がくりくりしていて。しそつちゅう力を入れすぎてボール紙を破き過ぎ、セロテープで補修しなければならない羽目に陥るのを、慎重に箱の隅へ爪を食い込ませる。食い込む。成功。

苺の酸っぱい匂いと、過剰な砂糖、そして少しの香料を顔に浴びる。自然と笑みさえ浮かんでしまう甘つたるさ。こちらも先ほどと同じく、三分の一に收まるよう箱を傾けた。

仕上げに上から牛乳を流し込む。奔流が一層式になつていたフレークの均衡を僅かに崩したが、その程度の乱れを惜しむ暇はない。浮かび上がってきた乾燥苺と麦の固まりを沈めるようスプーンでかき混ぜれば、後は混沌。乱暴な攪拌に、ボウルから牛乳が一滴飛び出して、テーブルの上で広がった。

シリアルはふやける前に食べるというのが彼女の信条だった。スローンは幅広。彼女の口は平均値に比べそれほど大きいとはいえないが、容易に適応して山盛りのフレークを飲み込んでいく。身を屈め

た拍子に垂れ下がった前髪が、危うく牛乳へ浸りそうになる。汚れたところでどうせ今からシャワーを浴びるので問題ないが、それでもフロリーは律儀に何度も指の先で搔き上げ続けた。時間など手に負えないほどあるのに、忙しいスペイン語に急かされる。否、途中から声は途切れた。引き継いで流れ出したのはセンチメンタルな前奏。

フランク・シナトラの歌声が、狭いキッチンに朗々と響き渡る。世界一のクルーナーは、ノイズなどでその価値を落としたりしない。季節はずれの「セブテンバー・ソング」。耳の中へ届くに任せながら、フロリーは無心にスプーンと頸を動かし続けた。奥歯にひびが入りそうなほど強く噛み締めればじわりと染み出す牛乳と、プラスとマイナスが組み合わさって丁度良くなつた糖分が混ざる。自らの咀嚼音が音楽を阻害し続け、はつきりと歌詞が聞こえない。*September, November*・今年も後一ヶ月と少し。誕生日までは半年。パパ・ナイジエルに相談を。どれだけ頑張つても、40を越えたら身体の線も崩れてくるし、大体そんな年まで無様な思いをしたくない。あと7年と半年以内に手に職を付けなければ。先輩のコールガールは“父親”の手を借りて看護師になり、ウェイトレスをしながら大学に通う健気な恋人と仲良く暮らしている。7年と半年。勝負をかけるならあと数年の内。

嫌なことを思い出してしまった。オートミールはいい加減べたつき始め歯に挟まりそうだ。ボウルが意外と深く、たくさん入ることを知っていたにも関わらず、フロリーは容量の三分の一まで注ぐと、いう暴挙をしてしまった。胃が動き出した途端湧いてきた食欲は、食べるという行為 자체を拒んでいるわけではない。それが問題だった。毎晩あれだけ踊っているのに、年を経るにつれカロリー・オーバーの状態が続く。舞台女優を夢見ていた頃は、練習が引けた夜の10時にレストランへ繰り出し、2時ごろにしめとしてシュリ

ンプカクテルをたらふく腹に収めても太りはしなかった。あのまま同じペースで食べ続けていたらどうなっていたことか。それでも少したるみ気味の横腹が恐ろしい。ダイエットなどできた例がないので、どこか意味のある日常生活の中で消費しなければならない。ボウルを掲げ、掬うのが面倒になつた粒たちごと飲み下してしまう。牛乳も良くならしい。脂質が高い。豆乳に代えれば良いと以前クリスターが助言してくれた。だがどれだけ頑張つても、フロリーはある独特的の臭気に耐えることができなかつた。他の案はいくらでもある。思いながら、彼女は今まで一度もそれらを試したことがあつた。

シナトラが幕の向こうへ引き取り、再びスペイン語がやかましく戻つてくる。

立ち上がり、スイッチを切つた。ぶつんと途切れた余韻が耳へ残つている間に蛇口を捻る。水は冷たく、冬の訪れが秒刻みになつたことを知らせていた。再び蛇口を捻る。洗つた食器を棚に戻す。

奥歯にこびり付いたオートミールの感触を、思つたより酸っぱかつた苺の味が残る舌で撫でる。いくら強く擦つたところで、どちらも剥がれてはくれなかつた。もどかしい。

「こにはいない男達に会いたいと思つた。どちらでもいい。身体中に栄養が行き渡つたはずなのに、まだ食べることができそうな気がした。フレンチトーストを食べながら砂糖の少なさに文句を言つたり、食の細さを笑いながら煽るようにテイクアウトの中華料理を搔き込んだり。

けれどもう、これ以上食べてはいけない。昼食までは。それまでの時間をどうやって過ごすかが今日最大の課題。とりあえずシャツ

を脱ぐ。ショーツを下ろす。

服を手にしたまま、じっと考える。だがどれだけ知恵を絞つたところで、何も思い浮かばないのは明白だった。考えてするようなことではないのだ。

とりあえず汗臭い身体と髪を洗おうと、フロリーは股の付け根を搔きながらバスルームに向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2060y/>

Twinkle, Tremble, Tinseltown

2011年11月24日08時47分発行